

Renaissance Symposium

'17秋

「宇宙を瞬く花」

シンポジウム記録



Mukogawa Institute of Esthetics in Everyday-Life
武庫川女子大学 生活美学研究所

■

「宇宙を瞬く花」
シンポジウム 2017年秋

■ CONTENTS ■

■

1 宇宙を瞬く花

- 講演 1 肥原 慶甫 (未生流家元)
講演 2 池坊 専好 (華道家元池坊次期家元)
講演 3 井上 治 (京都造形芸術大学准教授)

2 パネルディスカッション

- 登壇者：肥原 慶甫 (前掲)
池坊 専好 (前掲)
井上 治 (前掲)

進 行：松本佳久子 (生活美学研究所)
総合司会：鎌田 誠史 (生活美学研究所)

(2017年12月2日 甲子園会館にて)

1

■ 宇宙を瞬く花 ■

■

鎌田：只今より、武庫川女子大学生生活美学研究所、第27回秋季シンポジウムを開催いたします。本日は秋晴れの中、秋季シンポジウムにたくさんの方がお運びいただきまして、誠にありがとうございます。本日、司会を務めさせていただきます、生活美学研究所の鎌田誠史と申します。よろしくお願いいたします。

さて、本日のテーマは、「宇宙を瞬く花」でございます。生活美学研究所では、毎年年間テーマを定めて、それに沿った定例研究会を開催しております。本年度は「瞬」というテーマで開催してまいりました。今日の秋季シンポジウムでも、そのテーマに沿いまして、開催させていただきます。ご案内にありますように、それぞれの分野で当代一流の講師の方々をお招きしております。日本の生活文化の中に息づいている“美しさ”について、皆さんと共に考えていけるのではないかと、本日のシンポジウムに大変期待が膨らんでおります。それでは、当研究所所長の森田雅子よりご挨拶させていただきます。よろしくお願いいたします。

森田：ようこそ、皆さまお越し下さいました。ありがとうございます。生活美学研究所所長の森田雅子でございます。今日は皆さまのために選りすぐりの講師陣をお招きしております。未生流十世家元・肥原慶甫先生、華道家元池坊次期家元・池坊専好先生、そして京都造形芸術大学の井上治先生のお三方、いわば華道界の代表者が駆けつけて下さっているわけです。大変光栄なことだと思います。先生方、本当にありがとうございます。

さて、生活美学研究所に初めて今日来られたという方もいらっしゃるかと思うのですが、武庫川女子大学の附置研究所として、三十年ほど前甲子園会館内に、高名なフランス文学者で京都大学名誉教授の多田道太郎が設立したものです。深い森に塔が二つそびえている、これが目印の甲子園会館ですけれども、フランク・ロイド・ライトの愛弟子、遠藤新のデザインと、そして林愛作の構想により昭和初期に竣工して、東の帝国ホテル、西の甲子園ホテルと並び称



された名建築です。このようにして、本日はこの美しい館に皆さまをおもてなしできることは、本当に嬉しいことです。研究員一同、心より喜んでおります。

さて、今年の年間テーマについては、先ほど紹介にありました「瞬」でございます。瞬と銘打ち、瞬間にあらわれる永遠を見出す、日常生活の価値観を模索したいと思っております。皆さまは何気なく日常生活の一環として、家の前を清め、そして客人あるいは神様のもてなしとして花で飾りつける、そういった生活行動に霊的な価値を、精神的な価値を満たしている、価値づけていらっしゃるということにお気づきでしょうか。そうです。日本で花の装飾様式というものは、他の諸外国と比べて特別のものがあるようにも思います。まさに美花のうつろいと美花の旬で、小宇宙を構成していると言えるでしょう。その宇宙に謎が見え隠れするような、お花の美しさです。今日はその美しさの謎を、先生方に解き明かしていただきたいと思えます。また、いけばなの手技は長きにわたる厳しい花道の修練を貫いて、より確かなものとなっていくことも皆様よくご存知のことです。まず第一線でご活躍なさっている、生け花の名人のお二人に、創作実践を中心に、華道の核心に触れるご講演をいただき、さらに華道の思想史的観点からの最後のご講演に集約させていただきます。フォーラムの皆さまぜひ、先生方の話に耳を傾け、かつ立場を変えてご提案下さい。ディスカッションの輪に身を投じて下さい。本日の研究交流を大いに楽しみにしております。

さて、最後に研究所の今後の活動に対する抱負を述べます。皆さまはじめ、研究員の強力なサポートもあり、おかげさまで何とか目標としていた「明るく開かれた」研究所にするという第一目標はそこそこ達成できてきているように思います。さらに生活美学研究高度化のためのプロジェクトとして、阪神間の地域にあらわれている様々なシンボル、聖地を集める甲子プロジェクトなど、地域とともに取り組み、地域支援を活性化する研究プロジェクトが始動しています。今後とも生活美学研究所をよろしくお願い申し上げます。本日は最後までごゆっくりと知的饗宴と交流をご堪能ください。改めてご来場ありがとうございました。熱く御礼申し上げます。

鎌田：それでは、早速シンポジウムに入らせていただきます。本日は、三つの講演とパネルディスカッションを用意しております。講演は、おひとり40分ずつお願いしております。その後、15分の休憩を挟みまして、後半はパネルディスカッションを予定しております。

最初の講演は、肥原慶甫先生にお願いいたします。テーマは、「生け花の美とその瞬間」でございます。肥原先生は、未生流九世家元

■

肥原碩甫先生の次男として、兵庫県にお生まれになり、大学卒業後、生け花の修行を始められて、数多くの出品やデモンストレーションを行っておられます。2003年より伝統文化生け花こども教室を指導され、次世代への継承に尽力されております。また、スイスや中国での生け花指導、留学生への講習会の実施など、海外への普及に努められています。著書には『いけばな継ぎ紡ぐ』をご執筆なされております。それでは肥原先生、よろしく申し上げます。

肥原：どうも、只今ご紹介にあずかりました、未生流の肥原慶甫と申します。どうぞ、よろしく申し上げます。座っていいということなので、座ってやらせていただきます。生け花を生ける人ということでこの講演に呼ばれたのですが、なかなかしゃべるといことは難しい。ですから、自分なりの言葉でしゃべっていきたいと思います。武庫川女子大学へはもちろんはじめて足を踏み入れたのですが、私は甲南という学校に属しておりましたので、けっこうこの界隈はウロウロしている感じで、私の親友が武庫川女子大学出身の女性と結婚したこともあり、勝手に縁があると思っております。そして今日はこの話を聞いた時に、女子大生の前で話をするのかなと思ひ、逆の意味で緊張するなと思ったのですが、顔馴染みの方も来ていただいているようです。でも何よりプレッシャーなのは、池坊専好宗匠と井上先生という大学の先生と一緒に舞台に立つということ。これはなかなかないことなので、大変だなと思っております。テーマが瞬間の「瞬」ということですから、自分なりの生け花に対するそういったことを話していけたらと思います。よろしくお願い致します。

こう見渡してみると、生け花をやっておられる方も多いかと思うのですが、生け花というのは、室町の頃、立花や供花というところから始まっていると思います。流派が起こった時代が違いますので、それぞれ古典的だと思っていることも流派によって違うのではないのでしょうか。未生流は江戸末期に起こった流派ですから、立花とかそういったものは知らず、格花といういけばなを古典花として生けています。いけばなをされている方はよくご存知だと思いますが、流派によっては生花や生花とも言い、天地人の三本の役枝を配して生けるという花型です。当時は遠州流や、古流、松月堂古流などの大きな流派がすでにあり、その後発隊みたいな感じで我々の未生流という流派が起きた、というふうな流れになっていると思います。未生流は後発隊であるぶん、理論的にもしっかりと整備されておりまして、花が見やすいと言いますか、わかりやすい。比較的生けやすい部類になるのではと、自分では思っています。難しいのは難しいのですが、古流などは、我々の言う又木、または木密という、二股



に分かれた留め木を縦にはるのですよね。縦にはるのに、横に枝を、枝の脚を寝させるように入れていかないといけない。3本か5本くらいならそれでも大丈夫なのですが、何本も入れるには、立体的に入れるのが難しくなってくるのですよね。そこを、我々の未生流は斜めに又木を配しているのもともと立体的に脚も寝やすく、本数が増えてきても立体的に入れやすいと。おそらく流祖も色々なところをまわって研究をした結果、このやり方がいいのだという結論に行き着いたのかと思います。

はじめは当流に伝わる伝書の中にある瞬間の花、というような部類のものをちょっと紹介していきたいと思います。一瞬というのも、どう捉えるかによって違います。5秒を一瞬と言う場合もあれば、100メートル走の9秒10秒を一瞬だと言うこともあります。また桜の時期は一瞬にして過ぎるとか言いますが、まあ、それでも1週間から10日くらいはありますね、どういう粋で一瞬と言うかによってだいぶ変わってきます。人間の一生なんて、地球の誕生にくらべたら一瞬だというようなことも言ったりします。そのあたり難しい部分もあるのですが、当流において一瞬だといえるのは、例えば朝顔。あまり生けないのですけれどね。私は以前一度生けましたが、あまりうまくいきませんでした。一般的に有名なのは利休の朝顔ですね。良いのだけを生けて、他を全部切り取って、というものです。そんな豪快な話が当流に伝わっているわけではありませんが、生け方としては、朝に咲く朝顔を井戸の中に入れておいて、お客さまがもうじき来るといふ頃に井戸から上げて、それを生けると花が朝だと思っていいタイミングで開いてくれる、という生け方の教えがあります。まさにそれは、本当に手間のかかることで、なかなかできることでもないのですが、そういう意味で一瞬と言いますか、おもてなしの一番大変でかつ大事なところでもあるのかなと思いますね。夏の花は特に水持ちも悪く長く持たない分、イメージとして瞬間というものが強く出るのかなと思います。あと夏で有名なものは、蓮ですよ。蓮もやはり水持ちが悪いですし、葉っぱなんかどうしてもシワシワになってきてしまいますから、蓮が生けてあつたりすると、よほどのおもてなし感があると思います。今では、葉は色々な水あげ工法も出てきていますし、風が当たらなければ大丈夫かなというようにところもあります。やはり花は難しいですよ。よく四日で散ると言われます。初日はちょっと開いて蕾に戻り、二日目は大きめに開いて蕾に戻る。三日目は大きく開いて蕾に戻り切らず、四日目は開いたまま散っていく。そういう儂いところがあります。お花屋さんに頼んでも、どうしてもカチコチの蕾ばかり来ることが多く、それを切り取って生け花にするというのはなかなか難しいことです。ですので、それが



生けられているということは、よほど一瞬一瞬に思いを込めてなされているということがわかります。我々もやったとしても、撮影用にサッと生けてすぐに終えてしまったりですから。伝書を紐解くと、蓮は、現在と過去と未来、三世を生けるというような言い方もしています。開花は現世、蓮台あるいは「うてな」は未来、種があるので未来をあらわし、蕾は過去をあらわす。流派によっては過去と未来を逆にされている流派もあるかもしれませんが、三世をあらわすという表現がよくされていると思います。そういったところで、時間的なものを表現すると考えると、蓮もテーマである「瞬」に沿った花材であるのかなと思います。あと夏で、僕はあまり生けたことがないのですが、ねむの木なども夜葉っぱが閉じて、朝に開いてくるという習性があり、それは伝書に載っているわけではないのですが、生けるとなるとなかなか難しく、限られた時間の中で生けなければなりません。時間の経過を大事にするという意味ではこのねむの木も今回のテーマにあてはまる花材と言えると思います。あとは夏の花からどんどん変わってきますが、今の時期で言うとならば紅葉ですね。紅葉というのは本当に水あげが悪いのです。その日だけ生けられたらいいのですが、これがなかなか、枯れてしまう。未生流では真俊ましゆんといって、紅葉の一番いい時を生けなさいという生け方と、散る景色というのが伝書に残っています。生け花というのは一番いい時も、散りかけている時もまた風情良く見せていこうという考え方だと思うのですが、葉っぱをあえて散らし、雰囲気を出しながら未生流の花型に入れていくというものです。あとは桜。桜も一番開花がきれいですが、散る雰囲気もきれいだということで、散る景色も伝書に残っていたりします。そんな感じでまあ、我々未生流に伝わっているもので今回のテーマに合うような花材や生け方というと、このようになってきます。

そして、古典的な生け花と同時に我々は現代的な花も色々しておりますが、現代的な花は古典と違ってルールがなく、いかに新しいものを目指していくということになってきます。ですから、より瞬間的な花というものが多くなってくると思います。人前で生ける花というものが、瞬間の花といえるのかはわからないのですが、せっかくテーマが瞬間、そして、生け花を題材として来ているわけですから、ここで少しお花を生けてですね、見ていただいたほうが、僕の下手な話よりもいいじゃないかと思っております。そんなに大層なことではないのですが、器に入れていき、様々な変化を楽しんでみたいと思います。

また、これは、これから生けるのとは別にちょっと持ってきたものです。この間の個展で使わせていただいたアンスリウムですが、こ



図1 肥原慶甫氏が会場において生け花を披露する様子

のアンズリウムというのは、生の花はもちろんそれできれいなのですが、この間試しにやってみたものがあります。こちらです。これが瞬間のものと言えるのかはわかりませんが、ドライフラワーにしてみました。そうしたら、結構きれいに色が残る。でもこれには色んな工夫があってですね、もともと、普通に置いておけば、茶色になってしまいますが、乾燥材に漬けて、電子レンジでチンすれば、結構色が残るんです。我々が新しい花を生けていこうと思ったら、そういった工夫も必要になってきます。パリパリになって、生の花の美しさには勝てませんが、でもこうすることによって、ずっともつものが出る。一瞬の花の命も永遠にかえる事ができる。先人の方々は色んなことをして生け花の発展、見ようによっては造花に見えてしまうかもしれないですが、工夫をして、生け花を発展させてきたんだというのを、この間これを試してみてもつくづく感じましたので、紹介させていただきました。

さて、今からは、先ほども少しお話ししました、時節のものを、紅葉を主に生けていきたいと思います。古典的なものと竹花器を使ったりしますが、現代花になりますのでアクリルの器で。今が旬のきれいな紅葉です。これもちょっと、造りものの様な感じがするくらいですね。どこにさせばきれいに止まるか。面をこちらに向けてもいいし、ちょっと振りをつけて…こういう、黄色い色が混じっているのは、なかなかきれいなものです。

未生流の流祖の教えには、「虚」と「実」を等分に生けなさいというのがあります。「虚」とは虚構、フィクション。「実」とは自然、ありのまま。あるがままの自然がただ尊く美しいのではなく、人の手を介し生けることで更なる本質的な美を表現します。出生のとおり



生けるくらいだったら、その現場に行って見たほうが良いという考え
方です。しかしながら、未生流には昭和のはじめから「新花」「自由
花」というジャンルが加わり、それは自然や色彩、造形といったも
のを自由に表現する生け方で、今日はその「自由花」を生けていき
ますので、流祖の思いにはちょっと背くかもしれませんが、勸弁して
いただきます。そういう意味では、「古典花」と「自由花」とい
うのは、完全に別物として分けて考えたほうがいいですね。僕も古
典花っぽい自由花というのは、あんまり好きじゃなくてですね、せ
かく現代的に生けれるんだったら、新しくいこうよというような。ま
あ、紅葉が新しいかと言われると、そうでもないんですが、こうい
った透明感のある器を使ったりしながら、肩肘を張らない楽な生け花
をしていったほうがいいんじゃないかなと思います。明日になったら
パリパリになると思いますから、気楽に今、生けられるのが幸せな
話です。会場に立派な舞台花が置いてあるところ、邪魔するのもし
訳ないですが、これはこれで。

自然のままに、おもむくままに生ける「自由花」であっても、枝の
表情というのは調子を合わせて生けていきなさい、とよく言われます
ね。平面的に生けていくのであれば、全て平面的に生けていったほ
うがいいのですが、今日みたいに少し振りを入れていくのであれば、
全てそう入れていったほうがきれいになります。これは生け花の基
礎的なことですね。また、生け花、特に自由花では、一種類だけだ
と野にあるままという感じになりますから、何かを取り合わせるこ
とによって、互いを引き立て合わせます。

これくらいにしておきましょうか。紅葉と菊の投げ入れみたいな感
じですね。これで終わってしまうと、ただ差しただけみたいになっ
てしまいますので、これにちょっと違う器を足すことによって変化を加
えていきたいと思います。未生流の自由花においてはよくやる手法
ですので、流内の方に見れば、またこれかという感じになっ
てしまうかもしれません。このようにアクリルの器を前に置くことによ
って、ちょっと映り方が変わってきてくれる。実際にこの中に花が差
してあるわけではないのですが、こういった要素を加えることで、雰
囲気が変わってくると感じます。

これで逆に、ここが空いてきましたので、もう一入れします。ちょ
っと雑で申し訳ないのですが…ここもちょっと寂しいので、枝を足しま
しょう。

このようにして、ひとつ何かを加えることによって、雰囲気を変え
るというのも、人前で生ける時のポイントなのかなと思います。そし
て、これにですね、色を足すことによって更なる変化を。子供だま
しみたいなものですが、赤色を水に流し入れて…ちょっとずつ水の

■

色が変わっていく様子も結構いい。少し多めにいきましょうか。水っていうのはすごいですね。ちょっとしたことで雰囲気を変えてくれます。三角形の器でもいいですし、円柱とかであれば更に、湾曲の丸みが良い効果を出します。このように、変化を楽しむ、という感じで本日は完成とします。

僕の持ち時間はもうちょっとあるのですよね。これを片付ける時間を考えると、ちょっと早めに終わっておいたほうがいいように思います。僕はしゃべるのが苦手で、そのせいで花を無理やり生けたみたいなどころがあるので、申し訳ないと思っています。先日別の集まりがありまして、その時にフラワーアレンジメントの先生が「ちょっときれいごとみたいな感じですが、自分は花にとって一番いい環境にいさせてあげることが大事だと思っている。花が一番居心地の良ように生ける事を心掛けています。」みたいなことを言っていたんですね。えらい格好いいこと言うな、と思っていたんですが、我々は生け花をやるなかで、決していい環境に毎回置いてやれるかということとはわからないんですよね。場合によれば、折ってしまったり曲げたり、皮を剥いでしまったり。先ほどみたいに、折角そのままできいな花を、電子レンジで色だけを残す作業をするような事ですが、そういったことも大事なことだと僕は思っています。これは、自分にとってのエゴが強いことなのか、と考えますが、やはり生け花をするうえでは、そういうエゴも大事だと思っていますし、きれいなものを表現するには、必要だと思っています。ただそれが、独りよがりになると怖い。家元という立ち位置にいると誰も「あんた、間違ってるよ」とは言ってくれませんが、先程生けたような程度であればよくやることなのですが、その境目がなかなか難しいところです。今はちょっとしたことで叩かれる世の中ですが、僕はこの業界ではすごく甘やかされていると思っているので、それに甘えすぎないように今後色々見極めながら花と向き合っていきたいと思っています。ありがとうございました。

鎌田：肥原先生、ありがとうございました。素晴らしいお話と、まさか実演をしていただけたとは思っていませんでしたので、見とれてしまいました。本当にありがとうございました。なんだか撒収が勿体ないですね。肥原先生には、今季シンポジウムのテーマである、まさに、「瞬」を実演していただきました。

それでは引き続きまして、池坊専好先生をお願いいたします。テーマは、「点から線へ」でございます。池坊先生は、小野妹子を道祖として仰ぎ、室町時代にその理念を確立させた華道家元池坊の次期家元であります。2013年には、ハーバード大学においてワークショップ



プを、また、ニューヨーク国連本部において、世界平和を祈念した献花を行いました。更にアイスランド共和国名誉領事でもあられます。著書には、『いけばなときもの』をご執筆されています。それでは池坊先生、よろしく願いいたします。

池坊：皆様こんにちは。本日はこの秋季シンポジウムに、多くの方々にお集まりいただきまして、本当にありがとうございます。先ほどの作品、移動させてしまったのが本当に勿体ないですね。この横でしゃべったほうがいいのじゃないかしらと書いていたくらいなのですが。

私は、実はここに来るのが二回目になります。最初に参りましたが、今からちょうど3年前になるでしょうか。ちょうど戦後70年ということで、その時に『日本のいちばん長い日』という映画が、こちらでロケがあったんですね。その中で、私もちらっとだけ出演しております、きっと皆様方、どうして生け花人が『日本のいちばん長い日』なんだろうと思われる方もいらっしゃるだろうと思うのですけれども。どこに出ているのか、恐らくわかるか、わからないかくらいの登場の仕方ではありますが、その時のことを思い出しながら懐かしく感じておりました。また、映画繋がりで申しますと、今年池坊は、文献に記されてから555年の節目を迎えました。全くこれは偶然なんですけれど、この555年の節目の年に、私共の先祖であります初代池坊専好という人物が主人公の映画『花戦さ』が上映になりました。皆様の中で、『花戦さ』を観たという方、いらっしゃいますでしょうか。いらっしゃいますか。ああ、ありがとうございます。実はこの『花戦さ』という映画が出来ました時に、周りの方々からは、「池坊さん、大変だったでしょう。」と書いていただいたんですね。けれども、実際に映画を作りましたのは東映さんでして、池坊としましては、映画の中に出てくる生け花作品を制作監修するというかたちで関わりました。映画をご覧になった方、お気づきかと思いますが、大きな作品それから小さな作品含めて、約200の作品が出て参ります。一番大きな作品は、前田利家の館で、池坊専好が秀吉のために立てた「大砂物」という非常に大きな、横幅7メートル以上もある立花です。これを資料に基づいて復元いたしました。一方、町衆の方が自分で花を持って来て六角堂で生ける、という。ご覧になった方々、どのお花が、どのシーンが一番印象に残っておられますでしょうか。きっと皆様、それぞれに思うところが違うのですけれども、先ほど肥原お家元から朝顔の話がありましたね。映画の中でも実は、秀吉に対して千利休が朝顔を、という場面が出てくるのです。映画の中では、ちょうど専好を迎える時に、利休が朝顔を一輪生けるという、そう



いう場面が出てきます。ご覧になった方は記憶をちょっと辿っていただきたいのですが、その時利休に迎えられて、そして朝顔が一輪咲いているのを見てその後、専好は六角堂に帰って来るわけです。初代専好という人はそれまで、図らずも自分が六角堂の執行という大きな立場になってしまって、その重責からなかなか思うような花が生けられなくて畏縮してしまうわけです。そういった中で利休に招かれて、利休の温かいおもてなしを受ける。そしてその後何か吹っ切れたのでしょうか。カキツバタの作品を六角堂に生ける、というところがあります。その六角堂に生けられたカキツバタの作品、それを見て専好の友人、吉という友人がいるのですけれど、専好が次のようなことを言ったと語る場面があります。ちょっとご紹介したいと思います。「茶の湯というのは東の間だ。あとには何も残らないのだけれども、それが生きているということではないのか。」と。これは標準語でしたが、実際は京都弁なんですね。東の間という、あとにはなんにも残らない。でもそれが生きていることなんじゃないかと。この時に、花というのはまさに東の間で、この言葉のようにあとには残らない。そのようなものを美術館や博物館に入れることは出来ないわけです。茶の湯ではよく、一期一会という言葉が使われますけれども、花もまさにその瞬間を、そこにいた方だけが見ることができる、愛でることができる文化芸術といえるわけです。ただ、それは皆様ご存知のことで、ああそうなんだな、と納得されると思うのです。けれども私は日々、瞬間芸術である生け花と対峙して思うのは、生け花というのは本当に瞬間で、東の間で、あとには残らない、そういう要素もあるけれど、それとは全く相反する、反対側にある世界観、あるいは力というのも持ち備えているのではないかと実感するわけです。

と言いますのは、実は11月というのは、私にとっては色々なコラボレーションにチャレンジした、非常に挑戦的な月だったのです。まず最初は、能の世界とコラボレーションいたしました。10月は「菊慈童」という能ですね。そして11月は「紅葉狩」の中で花を生けました。この「菊慈童」も「紅葉狩」も共に花が出てくる演目です。昔は能の世界も生の花を使っていたそうなのですが、時代が経つにつれて、それこそ管理するのが難しい、維持するのが難しいということで、いわゆる造り物という造花ですね。造花で能舞台を飾るということになっていました。けれどもよく考えますと、能も生け花も中世に成立して、そしてそれから成熟してきた世界であって、恐らく最初の頃というのは、決して造り物ではなくて、生の、その季節の中で花を愛でながら、あるいはその花を生けるということも、もしかしたらあったのかもしれない、という原点に立ち返り、縦割りではな



くて、横断的にその時代を考えながら、ひとつコラボレーションが出来ないだろうかという企画になりました。実はこの中の「紅葉狩」に紅葉を生けました。先ほど、あの美しい紅葉、新しい解釈で生けておられましたけれども、私の方は、能舞台の中で、紅葉一色の立花を生けました。これ実はなかなか大変なこととして、切ると紅葉はどんどん蒸発して、ちりちりになってしまいます。ですから、油を塗ったり、間際まで色々な湿度や温度管理に心を配りながら、舞台上に花を飾ることができました。その時にご覧いただいた方々から、生け花も知っているし、お能も知っている方なのですが、こういった二つの世界のもの融合するということで、本当に昔の時にいざなわれたような気持ちでしたというお言葉もいただきました。また、10月の「菊慈童」の時は古典的な立花ではなくて自由花で、新しい花のスタイルで、またこういった古典芸能を彩ることも出来るのではないかという試みもいたしました。これも非常に貴重な経験となりました。更にはですね、実はお能だけではなくて、茶の湯の世界ともコラボレーションをこの前してきたところなのですね。鎌倉に一条恵観の山荘があります。一条恵観というのは、いぢじょう えかん後水尾天皇の弟君にあたる方です。後水尾天皇のことは生け花をされている方はよくご存知ではないでしょうか。文化に造詣が深く江戸の寛永年間、立花会を度々開催されたということが記されています。近衛家の言葉を書き留めた『槐記』の中には、後水尾天皇があまりにも立花が好きになり過ぎて、その為に歯痛が起こってしまった。花が好きになるとどうして、歯痛になるのかわからないのですが、もしかしたら太い真を立てる時に、ぐっと歯を食いしばるとか、あるいは花に夢中になるがあまり、歯が痛いことも忘れて治療を怠ったのか、そのへんはわからないのですけれども、そういった記録も残っております。立花会のひとつには宮中のお庭に立花上手と言われる方々を呼んで生け花をたてさせ、まるでそれは秀吉の北野大茶会と同じ、それを上回るくらいの規模のものもあったということもわかっております。後水尾天皇の文化サロンで、立花の指導役を果たし、また採点役をする役目を担ったのが、池坊専好という家元でした。この方は、『花戦さ』の初代専好とはまた別の、二代目の専好にあたります。この方は立花の名手であり、後水尾天皇の寛永文化サロンにもとても深く関わり、そしてまたその時に立てた花が絵図としても残っています。この専好のことをちょっと見てみますと、後水尾天皇の弟君である一条恵観のところにも行って、花を立てたということもわかっております。本来、もともとはこの一条恵観の山荘というのは、京都の西賀茂というところにありました。ただ現代では移築されて鎌倉にあります。私はそこに行きまして、一条恵観のところ専好が立てたであろう、あるいはもしかしたら

■

専好ではなくて専好の周辺の人が立てたとも考え得る作品が、杉戸に絵として描かれているのです。それを見せていただくことが出来ました。また、その当時、お庭の作庭にあっていたのが小堀遠州であったということで、小堀遠州から池坊専好にあてた書状も残っております。そういったことから、後水尾天皇を中心にして、お庭あるいはお茶、お花といった文化に関わる人たちが関わりを持っていた、繋がりがあったことがわかるわけです。そういった所縁もありますので、せ



図2 『池坊専好立花図』(重要文化財)
一条邸(摂政殿)で専好がたてた立花
華道家元池坊総務所蔵

かくでしたら21世紀という今の時代に、まさに400年くらい前のそういった方々が繋がっていて、お互いが同じ一時を分かち合ったように、何かこう昔を彷彿とさせるような、そしてまたそれが未来へ繋がるようなお茶会ができないだろうかということ、私もそれに参加したわけです。そしてその一条恵観亭にあります杉戸絵から、その時の花を復元し、また小堀遠州から池坊専好への書状も展示し、また遠州流のお家元、また一条恵観のご子孫の方、そして私と、400年の時を超えて集うことが出来たのです。この二つのコラボレーションを経て私が感じたのは、花というのは一瞬で、まさに束の間であとには残らないわけです。その場で消えてしまいます。でも、消えてしまうけれどもその一方で、こんな風にいと易々と、400年500年といった時間軸を超える、あるいは場所という軸を超える、時空を超える大きな大きな力を持っているんじゃないか。全く、一瞬の束の間と、そしてこの時空を超えるということは、相反しているように見えるけれども、でも瞬間だからこそ、時空を超えるだけの迫力とそして深さを持っているのではないかということを実感したわけです。おそらくこれは文化の持つ大きな特性のひとつだと思います。文化というのは非常に、私はしなやかだなと思うのです。例えば政治経済は非常にセンシティブな状況にあっても、文化というのはそういったことに関わらず、まさに草の根レベルで、人と人を個人レベルで結びつけることができるわけです。また、背負っている背景



や、それぞれの立ち位置が違っててもそれを一瞬で超えて、結びつける、分かち合える。そういう力を持っているのも文化ではないでしょうか。今回は、この二つのコラボレーションを通して、生け花という、瞬間だからこそ最も易々に時間を超える、空間を超える、私達が今生きている時代だけではない、その大きな大きな太い軸みたいなものを感じることができました。それと同時に私が感じたのは、では、こういった時空を超える力というのは、一体どこからどういう風にして育まれてきたのだろう、何が源になっているのだろうということなのです。私は、六角堂というお寺の人間ですので、池坊ということだけに限定して考えるならば、恐らくそれは、場の持つ求心力といったものも関係しているのではないかと。六角堂があった、ということですね。建物という意味ではなくて、六角堂という、いわば人が集まってきていた、その当時のお寺というのは決して、今のようにお葬式を行う所というよりはむしろ、情報交換の場であったり、あるいは行政的な役割も持っていたりだとか、実際に六角堂も祇園祭のくじ取り式の場所にもなっていましたし、本当に街の人にとっては、自分の喜び苦しみ、悲しみ等色んな気持ちを分かち合う、伝え合う所だったと思います。ですから、人が集まる場があったということが、一瞬にして消えてしまう文化芸術を時空を超えられるほどの力に転化させるひとつの要因であったのではないのでしょうか。そしてそれと共に、忘れてはならないのはやはりそこに、人という存在があったことじゃないかと私は思うのですよね。

考えますと生け花は、決してあとには残らない、本当に不思議な存在なのです。昔、アメリカに事務所がありました時に、そこに生け花作品を展示していたことがありました。外から見えるように、ガラス張りのディスプレイです。そうしますと、通りかかった人がそれを見て、「ああ、きれいなお花ですね。」と言うわけです。それで、「このお花は一体、いくらで売っているのですか。」と言うのです。「いいえ、これは売っているではありませんよ。この生け花の技と心を、私達はお伝えしよう、そして広めていきたいと思って、興味を持っていただけるように、これをこういうかたちで展示しています。」と言うと、その方はびっくりしたような顔をされて「商品にならない、経済的な効果がないものをこうやってディスプレイするというのは、なんて贅沢なことなのか。自分には信じられない。」ということを行いました。そういうことを考えてみますと、いわばそれがそのもので商品ではない存在のものを、こうして人が一生懸命長きに渡って伝えていく。自分が受け継ぎ、またそれを伝えていこうとした、その営みの崇高さと努力というのは、これは本当に数えられないほどのエネ



ルギーだと思うのですね。先人達にそういった、本当に数えきれないくらいの尽力をしていただいたからこそ、今、この瞬間でしかない生け花という文化芸術が、こんなにいと易々と、時間を超えて時空を超える力を持ち、また生き続けて、またこの世界に色々な機能を持って存在しているということを実感します。人がいなければ、生け花という文化芸術は、いくらたくさんのお金があっても、いくら例えば国が保護しようと言って、たくさんのお金を付けてくれたとしても、守ることはできなかったのではないのでしょうか。そして人というのは、これ不思議なもので、ずっと生け花に関わってきた方というのは、ずっと危機感を持っていたと思うのですね。自分が一生懸命伝えなければ、これは消えてしまう。自分が一生懸命、次の世代に渡さなければ、これはきちんと受け渡すことが出来ない、という危機感があったからこそ、むしろ自分が聞いたこと、先生から学んだことを、自分の時代の中で一生懸命解釈して、そしてそれをなんとかして次に伝えようという努力をしたのではないのでしょうか。

生け花という瞬間の芸術を考えた時に、私は本当に、そこに関わってくださった多くの方々のご努力とご尽力と、そしてそれと共に人間ってすごいな、と感じてしまいます。この大きな世界から見れば人が出来ることというのは、ひとりの人が出来ることというのとはとても限定されていると思います。人間はそれこそ花と同じように、束の間の命しか持たないわけです。いくら長寿社会と言いましても、千年も万年も生きるわけにいかないのですね。花と同じように、有限の世界を持っている人間が、でもその瞬間の美である生け花、きちんとその哲学も守り、そして見える表現、美というところも守りそして伝えようとしてきたこの努力も、決して忘れることは出来ないと感じています。まさに瞬間、そして瞬間だからこそ、そこに人が深く関わって、それを瞬間のものではなくて、一点だけではなくて、それを線として次に繋いでいくという、そういう営みがあったという風に感じています。

今生け花は、日本のものだけでなくになりました。世界中の人が、生け花という世界観、哲学そして美しさ、アシンメトリーな造形であったり、あるいは決して美しい花だけではなくて、植物のありとあらゆる状態に輝きを見出して生かそうとする哲学、そういったものにも興味を持っています。生け花のそもそもの存在も点、瞬間ということですし、それから私達が普段生けている花というのも瞬間だと思うのですね。でも、花という瞬間も、草木の命というスパンの目で見れば、限られた草木の命の中の、蕾から開花、そして実になって散っていくという線の中の一点なわけです。そして、そこに関わる人間も、私達が今いる時代というのは、永い地球の歴史で見れば一瞬なのです



けれども、でもそれを一瞬だけのことに終わらせないで、それをどうにかして次に伝えていきたい、それも少しでも良いかたちで次に伝えていきたいという、私達は見えない線を常に意識すること。自分達が生きているこのある時点という点を、どういう風に線にしていくのか、では線にしたら今度は面にして拡大していくのか、ということ意識していかなくてはならないのではないのでしょうか。そしてこれは、恐らく生け花のことだけではないと思うのですね。きっとありとあらゆる世界のことが、その時代だけ流行るのではなくて、それを伝統とするために。あるいは、本当に良いものならば、それを守っていくために、一点だけのブームや流行りではなくて、それをどういう風にして点の集合、点が続くことによって線にしていくのか。そしてその線が集まれば、またこれが面になっていきます。それをどういう風にしていくのかということを人は常に考えているのではないかと思います。

よく生け花は伝統文化と言われます。この伝統文化という言葉は、とても重い言葉ではないでしょうか。日本を代表する文化ということですが、日本の文化といっても、実はたくさん文化があるのです。今流行りの漫画、アニメも文化です。そして生け花や能やお茶といった、いわゆる伝統文化といったものもあります。そして、伝統文化というのは、一過性のものではない、ということなのです。一過性のものだけだったら、一時だけの流行りだったら伝統にならないわけです。伝統という名前がつくということは、その時代時代、色んな時代がきた中で、その時代の洗礼を受けながら、でもそれでも生き続けてきた。またはその時、その時ならではの人々の感性であるとか美意識を受け入れつつ、反映しつつ、また洗練されて生き続けてきた、生き延びてきた証でもあると思います。私はこの伝統文化という言葉の中に、生け花が経てきた、本当にその瞬間を瞬間だけにしないで線にしようとした、面にしようとした先人達の努力と、そして、生け花自身が非常に柔軟性を持って、その時代の息吹を取り入れながら生きてきたたかささというのを感じます。もうひとつ、非常に大きなことというのは、生け花は伝統文化であるとともに、生活文化であるということです。これも、とても大きなことなんです。素晴らしい芸術作品というのは、この世界中にあります。そしてそういったものは、いわば一部のアーティスト、本当に神様から才能を与えられた、あるいは凄まじい努力をして自分の世界を作り出したアーティストによって、創り出されています。でも、生け花は芸術的な側面を持つとともに、それが生活の一部として至る所に、私達の暮らしの中に息づいている、暮らしの中で伝えられてきた。これもとても大きなことではないでしょうか。昔の本を読みます



と、外国の方が生け花について研究されていることが多いのですね。例えばラフカディオ・ハーン、小泉八雲が日本に来て驚いたことは、日本の本当に、普通の田舎ですね、いわゆる田舎の家のところにお花が飾られてあると。それも、そのお花というのが本当に丹精込めて、その家の人が生けて、そして永い永いお稽古の果てに辿り着いた、そういった、もう自分のすべてをあらわしたような、本当に質の高い作品が、ごくごく当たり前のように家の縁側であったり、床の間に飾られてある。こういったことに非常に驚いたということも記されています。これも私達の中にもいますと、花を生けるのが当たり前のように思うのですけれども、この花を生けるという営みが、何も一部のいわゆる芸術家、と言われる人達だけではなくて、もう本当に日本中至る所、老若男女問わず色々な人達が自分の身近なものとして、暮らしの中で花を生け続けてきたということも、生け花が今に至っている大きな大きな原動力ではないでしょうか。花を生け続けることが出来たというのは、やはり日本の自然が非常に豊かであった。そしてまた、自然の中にも神仏をみた、敬謙な気持ちを持っていた、そして花を生けることによって自分の気持ちを伝えたい、あるいはまた、いらっしゃるお客様をおもてなししたいという、そういう心映えが如実にあらわれていたからだと思います。現在私達でもなかなか、次世代にどういう風にして生け花を伝えていくのか、この日本の伝統文化であり、生活文化である生け花を伝えていくのか、というのが大きな問題になっています。肥原お家元もそれから私も、日本いけばな芸術協会という組織に入っておりまして、これは流派を超えて横断的に、生け花界が持っている課題を克服して、そして今後の振興に努めようという団体です。そこで問題になっているのは、現在日本の文化やこのような生活文化が軽んじられる傾向があると。今、どうしても学校教育においても、まず勉強という、しかも勉強というのも、非常に限定されたかたちの勉強なんですね。目に見える、例えば試験で何点まで達しますとか、こういう資格を取りますとか、そういった限られた目に見える勉強の方が優位になって、本来は私達の暮らしの中に、あるいは先人達が守ってきた考えや思いの中にもたくさん学びがあって、たくさん伝えなくてはいけない文化や知恵があるのに、なかなかそういったことを伝える機会というのが減ってきています。けれども点を、私達がそれぞれ一生懸命生きている点を、線にするために、またそれを面にするために、今ここで一生懸命踏ん張らないと、それは絶えていってしまうだろうと、そういった社会の状況に対してもこれから流派を超えて色々な提案をしていきたいと思っています。日本の生活文化の豊かさというのは、これはとても特筆すべきことだと思います。庭にある自然の中の花を飾る、



そしてそれによって自分の心を託す。また、お客様をおもてなしする。私達は改めて、生活の中にある文化の位置付け、そしてそれを守っていくためにどういう風にしたらいいのかも、これから懸命に考えて努力していかなくてはいけないのではないのでしょうか。

もうあと数年すると、東京オリンピックがやってきます。東京オリンピックというのは、なにもスポーツの祭典だけではないのですね。つい、スポーツの方に陽が当たりますけれども、これは文化の祭典でもあるわけです。実際ロンドンオリンピックでは、ロンドンだけではなくイギリスの国中で、色々な文化的なシンポジウムや活動がなされて、そのことによって国としての活力があがったという報告もされています。きっと恐らく、日本の伝統文化あるいは日本の生活文化といったものも、オリンピックの場面で、またフューチャーされたり見直されたり、あるいは多くの方々に関心を持っていただけるのではないかと思います。そういった時期を前に、私達がそれぞれの立場で改めて文化を捉え直していくということも意味があるのかもしれない。

瞬間と、瞬間だからこそ持つ時空を超える大きな力。あまりうまくお話出来ず、お聞き苦しいところあったかもしれませんが、この後先生のお話とそれからパネルディスカッションもありますので、その時にまた深めていけたらと思います。ご清聴ありがとうございました。



図3 講演中の池坊専好氏

鎌田：池坊先生、素晴らしいお話しを大変ありがとうございました。それでは引き続きまして、井上治先生にお願いいたします。テーマは、「生け花の時間論—花の中の瞬間と永遠」でございます。井上先生は、大阪府のお生まれで、京都大学文学部を卒業後、同大学院博士後期課程を修了されまして、文学で博士号を取得されております。現在は、京都造形芸術大学准教授、また、旧嵯峨御所華道総司所學術顧問を

されております。それから、大変多数の著書をご執筆なされております。それでは、井上先生よろしく申し上げます。

井上：皆さん、こんにちは。井上です。先程は未生流と池坊という、今の生け花界を代表する流派の家元のお話でしたけれども、私の方からは少し、学術的な観点からお話ししたいと思います。今日のテーマは画面にありますように、非常に大げさな題名をつけてしまって申し訳ないのですが「生け花の時間論—花の中の瞬間と永遠」というものです。生け花の歴史において瞬間、あるいは永遠というものが一体どういう風に消化されてきたのか。そういうお話をしたいと思います。

芸術の中には様々な芸術があり、また様々な分け方がございます。ここにありますように、空間芸術と時間芸術という分け方もあります。空間芸術といいますと、建築であるとか彫刻であるとか、あるいは絵画や工芸といった空間を占める芸術です。一方、時間芸術というのは、書いていますが、例えば文学であったりあるいは音楽、また演劇であったり、つまり時間が進行することによってその芸術の姿が表現されるといった芸術です。それで生け花はどっちに当たるのかといいますと、普通は空間芸術です。もちろん、花が咲いていく過程であるとか、あるいは先程生けられた紅葉なんかは非常に水あげが悪いですから、すぐに枯れてしまう。そういったプロセスもあるのですけれど、そういったプロセスを普通は鑑賞することはしないわけですね。花の前に立っていれば、そういうことも見えますし、先程肥原さんがされたような、水の中に赤とか黄の液体を入れてその広がりを見るというのは一種の時間芸術であったかと思うのですが、普通は空間芸術とされるわけです。ですから、空間芸術とされる生け花の中で、時間というのは一体どういう風に表現されるのか。そのお話を少ししたいと思います。

最初にあげたいのは、『池坊専応口伝』^{いけのぼうせんのおうぐでん}という、非常に重要な花伝書です。今でも池坊さんでは、非常に重視されているものです。ちょうど今年、先程専好さんのお話でもありましたけれども、『花戦さ』という映画がございました。その主人公であった池坊初代専好の先々に池坊専応という方がいらっしゃった、その方が書き残したものでなんですけれど、今画面に映しているのが最初の序文の部分です。最初から読みましょうか、せっかくだから。「瓶に花さす事にしへよりあるとは聞き侍れと」、瓶に花を挿すということは昔からあったけれども、「それはうつくしき花のみを賞して」と、それは花の美しさのみを賞していたのであると。そして「草木の風興をもわきまへず、只さし生たる斗ばかりなり」と書いてあります。「此一流は野山水辺をのづからなる姿を居上にあらはし」、しかし此の一流というのは池坊です



が、そうではなくて、野山水辺自ずからなる姿、そういうものを表現すると。「花葉をかざり、よろしき面かげをもとし、先祖さし初しより一道世にひろまりて都鄙のもてあそびとなれる也」、先祖がそれをしてから、世に広まっているとあります。実際今日までずっと続いているわけですが、それで、これは非常に重要な部分なのですが、今日注目したいのはここに続く部分です。

序文に続きまして、こういう文が出ます。少し難しそうですが、実はそんなに難しくありません。「たゞ小水尺樹をもつて江山教程の勝概をあらはし暫時頃刻の間に千変万化の佳境をもよおす。あたかも仙家の妙術ともいいつべし」。ここで何を書いているかと言いますと、小水尺樹というのは少しの水と短い木ですよね。それらをもって、江山教程は非常にスケールの大きな山や川ですが、それを表現するという。ここで空間的なことが述べられている。一方で暫時頃刻というのは、今あんまり使いませんが、ほんの少しの時間ということですね。ですから、まさに瞬間ということですが、瞬間の間に千変万化、神羅万象の非常に大きな変化を表現する。ですから、それはまるで仙家の妙術である。つまり、生け花というのは仙術であるということです。実は、川端康成が1968年にノーベル文学賞を受賞した際に、記念講演でこの部分を引用しているのですが、それくらい日本文化において重要な文章です。ここで注目したいのは、池坊専応は空間のみならず、時間においても生け花というのはこれを凝縮したものを表現しているという、そういう話をしているわけです。そうすると、生け花の中で一体どういうところにそういった時間が表現されているのか、ということを見ると、まずは時間の象徴としての花という側面があります。これは非常に簡単と言うとあれですが、皆さんすぐに感覚としてわかるかと思います。つまり時間というのは生命にとっては成長の過程であり、成長のあとには衰退していくわけですよね、最終的には死んでしまう。それで、「時間とは何か」ということを考えるような段階の人間にとっては、大概それはもう衰退のことなんですよね。ですからこの花における時間というのは、基本的には儂さ、つまり無常、結局全ては消えてしまう、衰えてしまうという、その象徴として花があるというイメージになります。象徴というわけですからもちろん、その中には自分自身の姿が表現されているわけですが、ここにあげているのは、百人一首にもあります非常に有名な小野小町の和歌です。「花のいろは うつりにけりな いたづらに わが身世にふる ながめせしまに」。あつという間に花の色というのはうつろう、萎れていくということなんですが、もちろんそこには、美貌を誇った小野小町自身が投影されているわけです。ですから、花というのは基本的には、ほんのわずかな時間



に美しい姿を見せてくれても、すぐにそれを失ってしまう。そういう象徴として存在し、認識されてきたわけです。

一方で、逆に言うそうですね、これも『専応口伝』からなんですけども、こういう箇所があります。「無常の自覚」、つまり時間の移ろいというものが存在することを自覚すること。ちょっと読んでいきましようか、ちょっと難しいのですが、「聊是ヲ以アソブ人、草木ヲ見、心ヲノベ、春ノ秋ノアワレヲ思、一旦ノ興ヲモヨウス耳ニ非、飛花落葉ノ前ニ、カカル悟ノ種ヲ得事モヤ侍ラム」。結局何を言っているかということ、生け花をする人というのは、ただ花が美しいとかそういった感覚だけではなくて、生けた花というのはいずれすぐに散ってしまう。そういった、まさに仏教的な無常観ですよね。それを学ぶことによって、悟りの種と書いてありますように、悟道のきっかけと言いますか、それを花から得ようという勧めです。それゆえに生け花というのは、花の道いわゆる花道とされてきたわけです。ですから、花が「飛花落葉」すぐに散ってしまう、そういう現実がひとつある。これは瞬間の象徴です。

それと共に一方で、伝統的な生け花には型というものがあります。これ(図4)は、『立華時勢粧』という江戸時代に記された本なのですけれど、ということが書かれているかということ、「誠に古人花道を鍛錬して法をさだめ給ふ。其道理尤奇なるかな」。つまり、生け花の型というのは、古くから様々な人がよくよく考えてきたと。ですから、その理屈というのは本当に素晴らしいということが書いてある。型というのは、今は各流派様々にあります。とにかく様々な理屈をつけて、生け花の定まったかたちというのが考えられてきました。



図4 『立華時勢粧』

今日、生け花の世界にはいくつかの花態、スタイルがありますけれども、大きく分けてこういった伝統的な型を持っているものは二つあります。ひとつは立花です。もうひとつは生花あるいは生花です。この二つのスタイルがあります。ちょっと、立花をご覧いただくと、このような花です。ここに「六角堂池坊専好」と書いてあります。先ほど講演された専好さんは四代目ですよね。これは二代専好という、花道界にとってのスーパースターだった方で、江戸時代の前期、後水尾天皇の頃に活躍された方です。次の図にも、「同専好」と書い

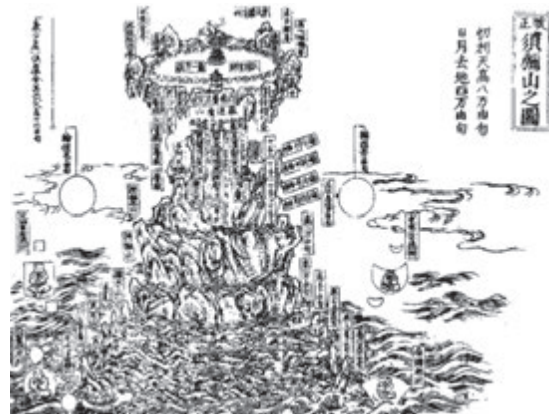


図5 須弥山圖解に描かれている須弥山の図

てありますように彼の作品です。こういったものが立花です。それで、立花というのが何を表現しているのかということ、時代によって様々な説明の仕方があるのですが、いくつか例をあげると、ひとつには須弥山を表現してきたという、そういう考え方があります。須弥山というのは、サンスクリット語で言うとスメールですね。こちらの花伝書には「立花の躰は須弥山を標し」とあります。躰というのは「体」という字ですから、要は立花の姿というのは須弥山を表現している。あるいは、「花のかたちはしゆ見を表し」と記されているものもあります。つまり、立花というのは須弥山を表して来たという考え方が古来あったわけです。少し見にくいかもわかりませんが、須弥山の図というのがあります（図5）。仏教的な世界観では、これが世界の中心にあるというわけなんですよね。このまわりに実は四つの島があって、我々が住んでいるのはその一つの瞻部洲というところだそうです、ここに描いてありますけど、小さくて見えないと思います。ともかく、真ん中に非常に高い塔のような山があり、これが須弥山です。切利天の高さ八万由旬と書いてあります。切利天というのはこの頂上にある世界です。また日月地を去ること四万由旬と書いてある。この由旬という言葉はインドの長さの単位ですけれど、この須弥山のちょうど真ん中を、太陽と月がぐるぐる回っている、そういった世界観をもってきて、立花というのは実はこれを表現しているのだということです。非常にスケールの大きな話ですけど。またあるいは、他の説明の仕方では、河内屋可正という、この人は大坂の造酒屋さんでお金があったので池坊の花を習っていたようですが、その日記に、「立花とは天地の理をつくし」と述べている。あるいは別の華道書では、「立花はもと天地自然の気をうつす」と記されている。つまり立花というのは単なる造形的、美的なデザインではなくてです

ね、こういう「理」であるとか「気」であるとか何か普遍的な何かを、それが何かというのは色々な説明がされますけれども、とにかく普遍的な何かを表現しようとするものであるとされてきました。

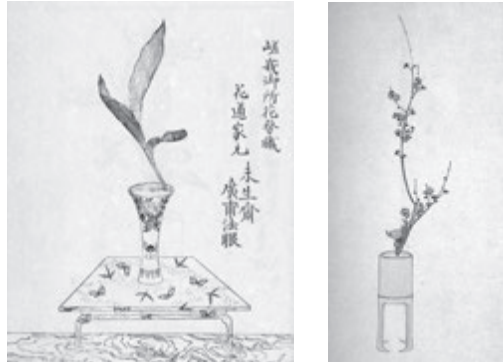


図6 生花の型を表す図

一方、もうひとつ伝統的な型を持つお花としては生花^{せい か}というスタイルがあります。こちらは嵯峨御流、あるいは未生流^{みしょうりゅう}でもそうですね。二代目^{たにしろ}の未生斎^{みしょうさい}広甫^{こうほ}という、江戸時代末期に活躍した花道家が生けた葉蘭三枚の生花です。こちらは池坊系の生花だと思いますが、非常にスリムです。いわゆる天地人という三才で構成されているものです。立花とはまた全然違うスタイルですけど、こちらの形も単純に美的なバランスだけで決めているわけではなくて、わりと深い理屈があるわけですね。それを少しご紹介しますと、これもいくつか説明の仕方がありますけど、これは肥原さんところの未生流系の説明であって、江戸時代非常に使われた説明ですけど、つまりどういうことかという、最初には「天円地方」という、地方の「方」というのは四角形という意味です、正方形とか使いますが、古代中国の世界観には「天円地方」という考え方がありますよね。天は円であって、地は四角形である、と。そこから花の形を作り出すんですね。「天は昼夜の差別なく万古運行して しばらくも休息せず 故に其徳を動として 其象^{そのかたち}を円とす」「地は天中にありて位を定め 万物これにつきて其所を安ず 故にその徳を静とし 其象を方とす」。そして、この天円と地方を合体させます。重ね合わせる。「天円地方合形」と書いていますよね、そしたらこういう形になります。それでどうするかと言うと、「初は天円にかたどりて、まるの中心より左右上下へ十字の経緯線^{たてよこ}を引き出す」、円の中心より左右上下に十字の縦横線を出すと書いてある。こういう風に、線を引くというわけですね。「経線より折て東西を合するとき三角の鱗形となる」つまりこの縦線に従って、折り曲げると。そしてこの直角二等辺三角形のことを日本

では歴史的に「鱗形」と表現しますが、その形が出来る。「天地徳を合せて万物象をなす 此花矩の起こる原妙」、つまり天地の姿を合体して、そこから出てくる三角形というのが花矩です。花矩というのは型とほぼ同じ意味です、その基であるというわけです。ですから、先程の三角形にこの形を当てはめるのですね。こういった理屈に基づいて、「凡天地間の形するもの此三角形より出ざるものなし」。つまり、この世の中のありとあらゆるものが、この三角形から出来ていると。やや強引ではありますが、そういう理屈を使うわけです。「是によりて当流花矩は、天地自然の和合に叶ひ 三角形の鱗をもつて挿花の形とするなり」、従って、この直角三角形というのは、あらゆる物の根柢であるという。従ってこの形というのは、たとえばこれは菊の生花ですけど、全てこの鱗形になる。もちろんここから様々なバリエーションが生まれてくるのですが、原則はこの形です。ですからこの形というのは、先程見た須弥山であったり自然の理や気であったりするのと同じように、やはり「普遍的」な形なんです。

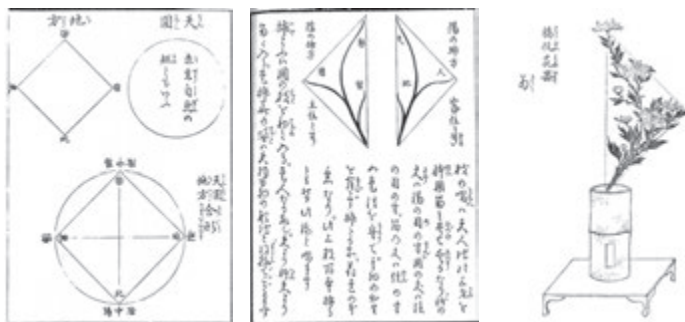


図7 天地人の根源である三角形をあらわす図

ですから、このあたりをまずまとめるとですね、今回「花の中の瞬間と永遠」というテーマでお話するとすれば、ひとつの解決の仕方は、生け花を二つの要素に分けるということです。つまり無常あるいは儚さ、つまりは瞬間の象徴としてのお花がある。つまりそれは素材ですね。一方、そういった素材を使って型、花矩を作る。この花矩というのは先程言いましたように、瞬間とは正反対の普遍的な原理を表現している。ですから、そういう意味では花の中に、瞬間と永遠というのが表現されているという、これは非常に分かりやすい説明の仕方です。つまり「分業的な解釈」です。「花材」と「花矩」という風に分けて、それぞれ「瞬間」と「永遠」を分担して表現していると。これはこれで、説明としては綺麗なのですけれど、せっかくだからもう少し冒険的な説明を試みたいと思います。

つまり、これを分業せずに統一的に考える。まさに時間論の話に

■

なるのですけども、どういうことかと言うとですね、時間というものを空間的に表現するということです。単純に言うと、例えば二次元は平面ですよ。そして三次元になると空間、今我々がいる空間です。二次元と三次元がどういう関係になっているかという、ある平面が別の平面に対する軸に沿って無限に重なっているわけです。下敷きみたいなのが上下に無限に重なって空間が出来ている。この空間にプラス一次元、これを四次元と言うとかなり胡散臭くなるのであまり使いたくないのですけれども、これを設けるとすればどうなるかと言うと、同じように空間、あるいは場面というのが何らかの軸に沿って連続的に連なっているわけです。その軸というのがどこに伸びているのかというのは、なかなか上手く説明出来ないのですけれども、ただその軸を時間と考えるのが一般的な考え方ですよ。つまり例えば今から10分後というのは、空間としては異なっているわけですが、それは時間の経過によって異なっているわけです。ところが、時間論にもさまざまな考え方がありますが、その中でひとつの考え方はですね、実はその無数の空間というのは同時に存在しているという考え方があります。時間が経過するというのは一種の錯覚であって、実は全てが同時に並列的に存在していて、その中を移動しているのだという。これは非常にラディカルな考え方ですけれども、ですから今、時間と移動と言いましたけれど、そこにおいて実は時間というのは空間的に考えることもできるわけです。そういった領域における「花」というのが、統一的理解における「瞬間と永遠」の花です。

ひとつ例をあげるとですね、例えばこれはバラの花をCTスキャンみたいにして、その断面図を撮った画像です。こういう風にずっと断面になっている。つまり二次元的に花を見ているわけですね。こういった二次元の花というのを見た時に、それぞれの断面は別の存在として見えてきます。二次元の平面の世界では。ところが我々は三次元というものを理解出来るから、実はどの断面も同時に存在することが理解できるわけです。三次元のバラの中に、この断面もこの断面も、この断面も全て同時に連続的に存在しています。ですから、それと同じように考えると、一次元プラスしても同じことです。そこでは、空間が断面になるということです。つまり、花が蕾から咲いていく、そして実になって、実も朽ちてしまう。こういう風に時間の推移があるわけですが、これが実はもう一次元上で考えると、同時に存在し得るという、そういう話です。でも我々には、これはちょっとイメージし難いですね。

しかしプラス一次元にあるものを、当該次元に表現することは実は可能です。例えばこの図はとても単純な図ですけど、三次元の立方体を平面上に表現しているわけです。我々は立方体というもの



を簡単に理解し得るから、この図が何であるかというのをすぐにイメージできます。サイコロ型のものですよね。これは、三次元の物体が二次元において表現されているわけです。それと同じように、こういう異なる時間が一体化したもの、これが同時に存在するような物体を三次元に表現する、それは結局「射影」というな形になるのですけれど、そういう考え方に生け花というものを当てはめることが出来るのではないかと。

そうなった時に例として挙げられるものを考えると、たとえば先程肥原先生がおっしゃった、「蓮の三世」という生け方があります。これは多くの流派にあります、室町時代から伝承されているものです。結局何かと言うと、ここにひとつ例があります。これは立花ですが、本能寺の変で有名な本能寺がありますが、実はそこにも立花の名手で大住院以信という方がいた。その方が立てられた立花なんです、もちろん彼だけでなく、こういった絵はたくさんあります。こういう実^{しほ}であったり蕾^{ぼけ}であったり、あるいは葉^はであったり、巻葉あるいは撞木葉^{しほもくぼ}とかであったり、蓮の様々な何と言いますか、時間の象徴を生けるものです。特に三世というのは、「過去」「現在」「未来」のことですけど、それを表現するという生け方です。『仏花抄』という室町時代の花伝書があります。これも誰が書いたのか明確にわかっていないんですけど、一説には能阿弥という室町中期の天才がいたのですが、彼ではないとも言われています。そこにどう書かれているかと言うと、「蓮花を立時は三世了達の心を立べし」とあります。「三世了達」というのは仏教用語ですね。了達というのは、完全に理解するというような意味ですけど、つまり三世を了達するというのはどういうことか。これも、仏教学においては色々考え方がありますが、ひとつの考え方としては先程言いましたように、「過去」「現在」「未来」の順番の経過ではなくて、同時にあるものとして理解すると。つまり、このような図式です。これを見て、こういった蕾^{ぼけ}があって花が咲いて実^{しほ}になっていくというような時間軸というようなことだけではなく、まさに同時にあるものとして理解しようとする。そういう考え方というのも、先程言いました立方体の考え方に近いのではないかと。実際に三世の生け方というのは、「過去、現在、未来の三世は、独り蓮のみに限らざるべし」と言っていて、実はあらゆる花にこういったことがなされるべきであるという花伝書もあります。今普通は、三世に生けると言うとき蓮が主ですけども、室町時代の花伝書を見ると、現在の花だけではなくて過去の花、あるいは未来の花、つまり時期が済んでしまった花なんかも一緒に生けると、そういったことが書いてある花伝書が多々あります。

ですから、「花の中の瞬間と永遠」というものを、さっき言った分

業的な非常にわかりやすい解釈から、もう一步進めて考えてみるとですね、「時間が空間に解消された花」というのが考え得るのではないか。そこにおいてはある意味、時間が空間に転化されるわけです。つまり、瞬間と永遠の関係というのが、極小と極大の関係という話になります。そしてこの極小と極大というのは、結局のところ「存在」と「宇宙」という関係です。というのも、瞬間というのは言うまでもなく相対的なものです。1秒というのは非常に短い感じがしますが



図8 三世をあらわす図

が、例えばある種の競技や実験などでは1秒というのはものすごく長い時間とも見えるわけですね。そう考えると、無限の前では、あらゆる有限なものは瞬間であり、極小なんです。換言すると、まさに有限の存在と無限の宇宙そのものであると。そういう意味で、今回設定された。「宇宙を瞬く花」というテーマは非常に面白いですね。「宇宙を瞬く花」というのは、日本語として少し変なんですよ。宇宙というのは空間であって、それを瞬く。「宇宙に瞬く」ならば、比較的わかりやすいですけど非常につまらない。「宇宙を瞬く花」ってなんだっていうのは非常に深遠なテーマですが、実は三次元に射影されているような花というのは、まさに「宇宙を瞬く花」であると言えるわけです。このような解釈はなかなかやこしいというか、自分でも何を言っているかわからないくらいのところなので、軽く聞き流してもらえればいいのですけれども。結局、花の中に瞬間と永遠というのは、必ず表現され得るということです。そういう意味でまさに『専応口伝』の、最初にもあげましたけれど、小水尺樹をもって江山数程をあらわすことと、暫時頃刻をもって千変万化をあらわすということは同じことである、ということになるわけです。それはまさに「仙家の妙術」「仙術」なんですね。つまり、こういった風に花道作品というのは単なる空間芸術ではなくて一種の「射影」として見られることもできるという話です。

最後にお話したいのは、そういった諸々のことを考えるとですね、やっぱり生け花というものを考える時に、花を切る事、曲げる事というのが根本にあるなということです。ここに挙げているのは、有名な岡倉覚三、岡倉天心です。『茶の本』読んだことある方、いらっしゃいますかね。非常に有名な本ですよ。そこに、花道家にとっ



ては耳が痛いことが書いてある。「花よ、もしミカドの国にいるのなら、いつの日か、鋏や鋸で武装した恐ろしい人物に出会うことであろう。その人物は「花の宗匠」と称している」、というわけなんです。確かにそうなんです。そしてその人達は「かくあるべきと勝手に考えた不可能な姿勢に仕立てるために」これはいわゆる型ですよ。「おまえを切ったり曲げたりねじったりするだろう」。確かにそういう側面もある。それ言いましたら、例えば茶道なんかも、お茶の葉をすり潰してね、熱湯に入れて、更にそれを飲み干すんですからね、よっぽど野蛮ですけども。まあ、お茶の人から見たら、花の人はそう見える。まさに電子レンジでチンしたりすることもあるわけですけど。ただ、花道というのは実はそれを、なんとというか踏まえると言いますか、そういった批判を充分に受け入れてきて、そこからじゃあ、なんでこういうことをするのか、ということを考えてきた。それが花道の歴史でもあり、その思想が生まれる源泉でもあるわけですよ。

たとえばこれは非常に極端な回答なんですけれども、重森三玲という造園でも活躍された方がいらっしゃいますけれども、その人が非常にラディカルな答えを書いている。いけばな芸術の考え方で、「それをどんなに曲げ様と、折らうと勝手であり、さうすることによって草木が可愛いそうだとか、自然性を否定するとか考へてゐる人々は、頭から挿花をやらぬ方がよい」というわけです。「それは草木に人間が勝手につけた宗教観と云ふお世辞で、ニセ物のオベッカを言つてゐるに過ぎないのである」と。これはひとつの明確な答えですね。今もちょうど、ご存知ですか、メリケンパークに富山から木を持ってきて立てるといふイベントがあり、かなり賛否両論あるみたいですが。やっぱり木を伐ると言った時、それをどう意味づけるかというのは、非常にナーバスなところですよ。重森三玲もこれを言う時に、かなり苦悩があったと思うんですよ。彼も花道を探求された人ですから、花の命であるとか、出生であるとかっていうのを十分に考えた上で、花を芸術として位置付けるには、こういう風に考えなければいけないという。けっして軽薄な気持ちで書いているのではなく、非常な覚悟を持って書いているんだと思います。ただこういったひとつの答えもありますけど、どうして花を切るのか。先程、肥原先生おっしゃいましたけど、それこそ、それなら自然の野山の木を見ればいいんじゃないかと、そういう考え方というのも江戸時代から既にあります。『生花正意四季之友』という、これは池坊系の花道家、落帽堂らくぼうどう暁山きょうざんという方が江戸時代に書かれたものなんですけれども、ここにこういう文章があります。「何のゆへもなく用る時は不仁ともいふべし」と、やはり何の理由もないのに草木を切って使うのは不仁であると。しかし「義有て用る時は道といふべし」つまり何らかの「義」



をもって使う時は、それは「道」になるんだと言うのですよね。「只草木の花をきり用ると斗心得て一概に不仁といふべからず」と。実は江戸時代から生け花家というのはわりとそういう非難を受けてきました。すぐに花を切ってしまうという風に。しかし、我々は「義」をもって、「義」があるからそれをしてるんだと言うわけです。この「義」が何なのかは、もちろん難しいわけですが、これにひとつの答えを出しているのが先程もあげました『立華時勢粧』という本です。そこにまた同じように書いてある。これはQ&A方式になっていて、読んでみると、「或人の云、立花は山木野草のおのづからなる景気を瓶にうつすを至極とす」。これは最初に挙げました、『専応口伝』を踏まえているんですね。そうやって、「おのづから」なる姿を表現すると言っているのに、「然に木をねぢ、草をためて立る事、いかがぞや」、木をねじる、あるいは草をためるっていうのは、曲げるということですが、それは一体どういうことですか、とそういう非難に対して、これも非常に明確な答えを出している。「されば木をねぢ、草をたむるはおのづからなるすがたをうつさんがため也」。木をねじったり、草を曲げたりするのは、おのづからなる姿を表現するためである、というわけですよね。これは非常に名文だと思います。おのづからなる姿を表現すると言いながら、木を曲げるのはどうしてかとう疑問に対して、そもそも、おのづからなる姿を表現するために木を曲げるんだと言うわけです。山にある木だけでは表現され得ないものを、人間が何らかの力を加えることによって表現する。そういったものがまさに「おのづから」であると、そういう考え方です。

そして最後ですけど、生け花の義というものを考えると、まず切ることに対する意識。今はもちろん、花材というのはたいがい花材屋さんと言いますか、花屋さんで花を買う。注文して届いている、教室に。ですから花を切るという意識を持っている花道家っていうのは、実はあんまりいないですよね。実際に花を、その日使う花材を切ってくる人、もちろんそういう方もいらっしゃいますけれども、花屋さんを介することによって、なかなかそういう意識から遠ざかってしまっているところが、ひとつあると思います。このような環境の中で出来てくるものは何であるかと言うと、ひとつは自己表現のための花です。いわゆる現代花、自由花というのはこういったものが非常に多いです。それはそれで素晴らしいことですが。あるいは空間装飾ですね。こういう会場なんかは、まさにそうです。ここにお花があることによって、空間がそれこそ華やかになるわけです。あるいは、型の稽古のために生けるといふもの、これは当然多くなされているし、饗応というのは茶花なんかもそうですけれども、こういう会場花なんかもそういった側面がありますし、玄関花なんかもあります。し

かし生け花、あるいは花道という側面から考えた時に、やっぱりその、花道家が目指してきたものというのは、何かその時空の枠内にある野山の草木、つまり屋外に出たら様々な植物が目につきますけど、そういった眼前の自然だけではなくて、それはそれで見ていればいいのだから、それ以上のものを何か表現しようとしてきた。それはまさに、池坊で言うところの「おのづからなる姿」、おのづからなる花。「おのづから」というのは非常に難しい言葉ですよ。単なる眼前の自然ではないのです。根源の姿であって、「おのづから」を漢字で書くと「自然」と書くわけですけども、これは池坊系でずっと言われてきた。あるいは「虚々実々」というのも、未生流系なんかでよくこういう言葉を使いますが、「虚実等分」であるとか、「虚」と「実」。つまり「実」というのはまさに眼前の自然なんですけれども、それだけではだめなんですね。やはり何らかの「虚」というのを混ぜてくる。そのことによって表現されるものというのは、もしかしたら池坊でいう「おのづから」なのかもしれないですけども。何かそういった、時空を超えた、時間と空間という限界を超えたところにあるものを表現しようとする。先程の大住院の蓮なんかもそうかもしれない。そういったものとして生きている花を切るんだ、というような、そういうひとつ



図9 講演中の井上治氏

の大義名分というのを考えてきたのではなかろうかと思うわけですが。といったところで、私の話はこのあたりで終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

鎌田: ありがとうございます。井上先生には、学術的な観点から素晴らしいお話をいただきました。では、第一部は終了させていただきます。ありがとうございました。

2

■ パネルディスカッション ■



鎌田：それでは、第二部を始めさせていただきます。パネルディスカッションには、肥原慶甫先生、池坊専好先生、井上治先生に引き続きご登壇いただきまして、進行を、生活美学研究所の松本佳久子が務めさせていただきます。それでは、先生方よろしくお祈いします。

松本：それでは早速、よろしくお祈いいたします。私は本当に、花道を極められたそうそうたる先生方と、同じ壇上に上がるのが恐れ多いような気がしておりますが、普段は時間芸術の音楽を専門としておりまして、そういったところから、的を得たお話しが出来るかどうかと心配もございします。しかし、大変興味深いお話を伺いまして、ぜひ残り少ない時間ではございしますが、先生方と共にそれから会場の皆様方と共に、充実した一期一会の空間を作らせて頂ければと思ひます。どうぞよろしくお祈いいたします。

それでは、三人の先生方に奥深いお話をいただきまして、学術的に、そしてまたライブとして生けていただいたりという、本当に多彩な内容だったと思ひます。これはまさに、池坊先生もおっしゃっておられたような、滅多にないひとつのコラボレーションではないかと思ひますので、ぜひ、他の先生のお話を聞かれた中で、これはひとつ言い残したことがあるとか、これについて先生方同士でお尋ねしたいことがあるとか、そういう、ふとこのコラボレーションの中で浮かびあがってきた連想でも、また感想でも結構ですので、ぜひ補足をいただければと思ひますがよろしいでしょうか。では、肥原先生からお祈いいたします。

肥原：僕はですね、その、お二方の講演の素晴らしさに圧倒されましたね。やはりこう、人の前に立つ者としては、花はもちろんですが、話し方もきっちりして、勉強をもっとしなければ、と改めて思ったという感じでは。

松本：とんでもないです。非常に軽妙なお話に、会場からは笑ひも

起こっていて、まさに生きていくプロセスも直に見せていただいて、生けるお姿も込めて非常に美しいなと思いながら拝見してしまいました。そして先程生けてくださったものが、あちらの方にありますが、本当に形というものが永遠に留まらずに、刻一刻とうつりゆくさまを見せていただいたと思います。本当にありがとうございました。では池坊先生、よろしく願いいたします。

池坊：はい。私は肥原お家元の作品は、日本いけばな芸術協会やいけばなインターナショナルの世界大会のデモンストレーションで実際生けられるところというのは、何度か拝見したことがありまして、でも本当に今日は間近で拝見することが出来て、生け花が刻々と出来上がって、まさに空間芸術が出来上がっている瞬間の中に、色のついた液を入れて、またそれがどんどん水の中に浸透していく。時間的な要素も含められて、今日のテーマと本当にぴったり、時間と空間を超える生け花が出来上がっている姿をととても堪能させていただきました。そして井上先生のお話についてですが、華道家というのは意外とこう、生けるということがあまりにも当たり前、身体に染みついていて、実際に自分がやっていることがどういう意味があるのかとか、生け花とはどういうものであるかということや、なかなか理論立てて考えるということが意外と少ないのです。これまでの経験値の中で、生けるといことがいわば身体能力のひとつになっている部分がありましたので、今日色々なお話を聞いて、無造作に自分がしている「切る」ということが、こういう罪深い見方があるのかとか、あるいは「ためる」ことに対する生ける人間とは異なる見方等、色々な文献に基づいて教えていただきました。あらためて華道家とはなんであるのか、花を生けるといのはどういうことであるのかということや、考えるきっかけをいただいたなと思いました。

松本：ありがとうございます。本当に、身体の一部になっておられるということで、その中にはやはり、日頃の積み重ねと修練があるのだなということが改めて伝わってきましたけれども、そういった何気なくされる域まで達しておられる、そこをまた、理論的な背景として井上先生もご説明くださったんじゃないかと思っておりますので、非常に緻密な理論を、本当に限られた時間の中でご説明いただき、そして何よりもこの「宇宙を瞬く花」という非常に壮大なテーマに沿ってご説明いただいたと思うのですが、ぜひ、補足等ございましたらよろしく願いいたします。

井上：はい。私の補足というのは特にございませんけれど、お二人

■

のお話とお花を拝見しまして、肥原先生のデモンストレーションと言いますか、結構ああいうデモンストレーションって、大体決まっていますか、事前に準備しているじゃないですか。それをこの場で作られるというのが本当すごいなということと共に、その時の瞬間、瞬間の先生の中の美意識と言いますか、その時の花。また、紅葉なんて本当に水あげが悪いですから、準備した時とも少し変化していると思うのですが、それに応じて生けられていく様というのが、まさに時間芸術と言いますか、素晴らしいなと思って拝見いたしました。そして池坊先生のお話、特に私が興味をもったのが生活文化というところでして、先程も少し話しましたが、いわゆる伝統文化としての生け花、あるいは花道というものと、生活文化としての花というもの、これらの関係というのは実はなかなか一致しがたいところもあるわけですよ。これは茶道でもそうですね。一方では「非日常性」というのが根源にありながら、生活文化でのお茶というのはどうなるのか。ですからその「点と線」という観点から言えば、我々全てがひとつの点として、線を作っていくべき存在なのかもわかりませんが、それがどういう方向に線を作っていくのかというのは、これは本当に難しいと言いますかね、考えてわかるようなことではないし、あるいは後からみたらわかることなのかもしれませんけれど。ひとまず伝統文化と生活文化の関係というのは重要なテーマだなというように改めて思い起こさせていただきました。

松本：ありがとうございます。井上先生のご講演を拝聴しておりますと、時間と空間、この異なる次元をひとつ上の次元から射影というかたちで統合的にご覧になるということ、生け花を通してそういった世界観をあらわしているんじゃないか、という風におっしゃったように思うのですが、なぜそれが生け花で可能になるのでしょうか。また、それは生け花ならではののでしょうか。あるいは花ならではの、とか。あの、先程の三世をあらわすという肥原先生のお言葉もそうでしたし、蓮の花や朝顔の花、時々刻々とうつつる紅葉もそうですけれども、そういった三世を共にあらわす、ひとつの空間の中に同時にあらわす。そして点から線へ、伝統と日常というようなことがなぜ、生け花の中でそれが可能になっているのかということについて、少し先生方からご意見と言いますか、ディスカッションしていただければ幸いです。いかがでしょうか。お話いただく順番は特にないのですけれども。

井上：そうですね。芸術というものが普遍的にそうであるとも出来ると思うのですよね。それこそ、松本先生がご専門の音楽



なんかでも、例えばモーツァルトなんて本当かどうか知りませんが、一瞬で最初から最後まで曲を作ったという話があるじゃないですか、冒頭から順番に作るのではなくて。そこでは時間というものを超越したものがある。ですから彼の曲を聴いた時に、順番に聴いていくというよりは、それ自体ひとつの0秒のものとして聴くという、そういう考え方と言いますか。そういう超越性というのはあらゆる芸術に言えるかもわからないですけど、特に花に関して言うと、やっぱり素材が花であるというのはとても特徴的だと思いますね。先程のお話でも言いましたけれど、花というものの自体が非常に短い時間、まさに瞬間の象徴である。もちろん生け花の場合はいわゆる常磐木と言いますよね、松であったり桜であったり、そういったものも使いますけれど、やっぱりそういった生き物を素材としている。それ自体が非常に罪深くもあるし、大きな可能性もある。というので、やはり素材が特徴的であるのが大きいかなと思います。

松本：ありがとうございます。そのあたりは先生方がいいかでしょうか。そうした生きている花というものを素材として、花と言っても広い意味でと思うのですけれども、向き合われる時にどういったことを考えておられるのか。おのづから、そしてまた本当に意識されない中でそのおのづからあるものを切り取っておられるのか、どうなのかというようなことは、なかなか凡人にはわかり辛いところではありますが、花のどういったところと向き合っておられるのかということも含めてお考えや、連想されたことでも結構ですので、お聞かせいただけますでしょうか。

池坊：はい。生け花に限らないことになるのかもしれないですけども、文化芸術というのは見えているものだけにしか意識がいかないというのは問題だと思うのですよね。むしろ見えて表面的に目の中に入ってこない部分に何があるのかということ、どれだけ読み取ったり感じたりそこから想像したり、他のものと結び付けて連想出来るかということが、とても大きな意味を持つのではないのでしょうか。例えば、私達華道家は、鋏で花を切るわけですよ。切るというのは普通、減らしていく作業ですね。丈が長いものを短くするとか、花がたくさん付いているものを切って少なくするとか。でもそれは表面的には短くなったり数が減ったりするのですが、その内容、伝えたい世界観というのは、むしろ切ることによって、残った部分をよりクローズアップさせて、多彩で豊かな世界を提示するという役割があって、鋏というのは何も減らす、マイナスにする道具ではなくてプラスにする。華道家にとってはプラスにする道具であるし、また生け花はそうでな



くてはならないと思うのですね。先ほどの、秀吉のために千利休が茶室に一輪の朝顔を、というのもたくさん朝顔があるのではなく、一輪だからこそ私達は豊かに連想するのであって、そういう意味では相反することがひとつの中にあるというのは、芸術や文化が持っている特性というか宿命というか。だからこそ人は色んな連想をしてきたし、想像もしてきたし、時には妄想もしてきたし、その中で色んな解釈が広がったりして豊かになって展開してきたのではないのでしょうか。生け花は、常に生きている花と向き合うということをしてきましたよね。時々生け花を始めたばかりの方と向かい合っていると、花の蕾を切るのが可哀想とか、こんな風に切らなくてもいいのというような声を聞くのですね。そうしますと、ああ、自分自身もそういう風に思っていた最初の気持ちを思い起こさせられて、自分が切ることによってマイナスではなくて、プラスの世界を作り出せているんだらうかと、切ることが花の命を殺めることであつたり、花を傷めることになっていないだらうか。自分の自己満足になっていないだらうかという、何か華道家としての原点みたいなものを教えられるような気がします。生けることが当たり前になっていますけれども、常に覚悟や責任感を伴う仕事だなと感じます。

松本：ありがとうございます。切ることによって意味が増える、まさに切るにも拘らず「生け花」というのもひとつの逆説であるように、素朴に思いましたけれども、そういった逆説的なことが並べ置かれているこの時空間というのが、まさに生け花ではないかという風に思います。先程肥原先生が虚と実、「虚実等分」というようにおっしゃいましたけれども、自然のものと、それこそ人工の素材も間に入れられ、そして空間的なものに時々刻々と変化する色水も入れられ、その中で、豊かな行間というか、まさに見えないものが見えるような瞬間というのを目の当たりにさせていただいたと思います。そういったことは、常に意識されているのでしょうか。

肥原：虚実等分というのは、古典花においては虚と実を等分にしない、ということです。今回いけた現代花においては虚構と実像というのはかならずしも等分でなくてもいいと思いますが、ある程度存在することだとは思ってまして、意識はしています。ただ、まあそんなに古典花ほど厳密ではないですね。どこの流派でもそうですけれど、花をいけるには自分自身の中にテーマを持っていますし、また花材の特徴を生かすのも大切です。あまり難しく考えずに。ただあんまり、先程も言いましたけれど、本当に生えてるようなままであつたらちょっとあかんなあ、というくらいを考えています。



松本：それにしても本当に不思議なんですけど、自然に生えているものを見るよりも、より自然らしく、その場の雰囲気であるとか風であるとか、今まさにここで感じられたと思います。本当に400年ぶりに、当時のものを再現して生けたり、555年目に色々な催しでコラボレーションをされておられると思うのですが、そういう中でありありと、「今ここ」で、「あの時あの場所」での出来事というのが再現されているんじゃないかと想像したりもしています。虚と実、瞬間と永遠、そして空間としては宇宙とまでありますが、ぜひ、花というひとつの素材の持つ特性、そこからどのようにして限界を超えるのか、というようなところを、井上先生、アイデアがございましたらご説明いただければと思います。

井上：花の持つ特性、難しいですね、それはね。でも例えば、拈華微笑ねんげ びしょうというエピソードがありますよね、ご存知お方も多いかと思えますけど。英語でもflower sermon「花の説教」と呼ばれているように、仏陀がお弟子さんに道を示す時に、花だけ示されたんですよ、何も話さずに。それがどういう意味なのか、ほとんどのお弟子さんはわからないけれども、摩訶迦葉まかかしやうというお弟子さんだけが微笑された。まあ、全然わけわからなかったから微笑されたのかもしれないですけど、一応、彼だけは理解したという風に伝わっていますよね。だから、仏陀が花を示したということは、仏陀自身も花に、何かその仏教の真理というものがここに象徴されている、宿っていると考えられたということなんでしょうね。そしてその花の持つ意味というのはそういうところから、やはり人間自身の意味と、なんとというか、パラレルと言いますかね、人間も短い人生ですよ。ずっとそれと重ね合わせるものとしてあって、一言で「無常」と言うと、わかっているようであんまりわかっていないと思うんですけど、そういう論理に結びついてきた。花というのはそういう意味で何か、自分達の所与の条件と言いますかね、そこに自分達を見ってしまうところがあるのでしょうか。そういう意味では花の可能性というのはとても大きいのではないのでしょうか、少なくとも人間にとっては。そういうことは感じます。

松本：ありがとうございます。花を通じて、まさに須弥山をあらわしていたり、仏教的な要素そして神の依り代として、人々の心精神性を表すものであると同時に浸透し、日常生活にも生きている、という。今まさに生きていることを表しているのかもしれないですね。ありがとうございます。そういうものを点から線へつなぐということについて、池坊先生のお話の中からどのようにして伝えるのか、やはり、年

月はかかるとは思いますが、どういったことを大切に伝えようとされているのかってことも、もし出来ましたら、伺えたらと思います。

池坊：はい。ちょっと先程のご質問にも戻って、お答えしたいと思うのですが、共に。生け花が他の芸術と違うところは、花材というのがひとつの個性とひとつの命を持っているということなんです。例えば絵を描くってということになると、私達が色を混ぜたりとか、それから色んな形に作ったりということが出来るわけですが、花というのはすでにもうそれ自体が生きていて、それが個性であり、ひとつの命を持っていますから、造形的には絶対に限界があるのですよね。花は永遠に生きるものではないですし、生け花というのは何であるかという解釈から始めれば、色々な流派の方や色々な華道家の方が、これが生け花である、という範疇があって、色々な解釈が出来得るとは思うのですが、生の花を相手にするということを考えると、自ずから限界というものがあるだろうと。ただ、私は限界というものが決して悪いとは思ってなくて、むしろ色んな制約があったり、限界があるからこそ、人間は今まで色んな知恵や工夫をして、そこからなんとかして違う道はないんだろうか、こういうことが出来るんじゃないだろうかと等、発展してきて、それで文明が出来てきたと思うのですよね。ですから制約があったり限界を感じるということはむしろ、必要なことであって、それがまたひとつの突破口であり、次なる世界へのステップにも繋がるんじゃないでしょうか。ただ、生け花というのは出来上がって、作品が出来たから完成ではなくて、それでそこに生けた人がいて、それを観に来る人がいて、観に来る人がその作品を観てそれに対して解釈を加えたり、自分はこういう風に考えるという風な感想を持ったりして、観に来られた人があってはじめて完成するとも言えると思うのです。きっとそういった方々の解釈や想像というのは無限なわけで、かたちとして、命あるものとしての物理的な限界はあったとしても、観る方の解釈によっては、色んな無限の広がりが出てきて、またそういったところも面白いのかなという風に、私自身は思っています。

それをじゃあ、点から線へどういう風に伝えるかということなんですけれども、今、色んな学校で生け花というものに興味を持っていただいて、生け花というのは色んな切口で勉強できるのではないのでしょうか。例えば植物ということを通して、自然界、自然と例えば今の状況、あるいは環境問題を考えるということも出来るし、先程、三角形とかの話もありましたけれども、造形的な方面からのアプローチも考えられますし、それからもちろん昔からあったように情操教育であるとか、それから介護とか福祉の教育現場では、生け花がどうい



う風に介護や福祉の面においてどういうことが出来るのか、どういう風にしたら効果的なのか、ということも勉強できると思います。それから国際関係などでは、国際社会で生きていく中で、日本人としてのアイデンティティを育む一助として活用出来ないか、考えるヒントに出来ないかということも可能だと思います。色んな切口から学べる世界だと思いますので、若い世代が実際の生活の中で生け花に触れることが出来る環境が減りつつある中で、学校教育といった公の機関の中でも積極的に取り入れていただきたいなと思い、そういうはたらきかけをしています。

松本：ありがとうございます。教育の現場や介護という、本当に幅広いですね、人と人との関係性、それらに影響を与える生活環境全体についてもやはり生け花というのは非常に効果的であり、また生きとし生けるものの、生きること自体の意味を表すということを先程のご講演の中でも、先生がおっしゃってくださっていたように思うのですが、儚いものの中から、生きていくということの意味について、環境の中でさりげなく触れる中でも感じとることが出来るのかも無いですね。先程の一瞬から永遠へということから、生けた時点ではまだ終わっていない、相手がいてこそ無限に広がっていくということもおっしゃって頂いて、生けることによって非常に世界が広がっているように思います。ぜひ肥原先生もですね、日頃、伝統の文化を伝えるうえで、どういったところを、何かこうマニュアルだけで教えるようなことは当然のことながら出来ないと思うのですけれど、そういった見えないところについてはどのように伝えておられるのでしょうか。

肥原：見えないところはどうしてるんでしょうね。そんな、難しくねえ。本当に僕は、教えるということは、通り一遍のことしかあまり出来ていないのですが、教え方としてはとりあえず良いところを褒めろ、みたいなどころですね。何か良いところは絶対にあるはずです。まあ、言われていることと答えが違っているのかもしれないですけども。広めるということに関しては、どうなのでしょう。今のところほんとに悩み中というか、今生け花というものをどうやって広めていったらいいのか。日本いけばな芸術協会では世界遺産入りを目指すとか学校教育にどうにか入りこめないか等、個々の流派ではできない事は協会において多くの流派の方々と協力しながら進めていき、個々で出来ることはこの業界の発展のために尽くしていきたいと思いますが、今本当に、先々どうなっていくか、不安いっぱいな感じですね。

■

松本：肥原先生自身も、目に見えないものをどのように、ということ
をそのように悩まれていたと思うのですが、では、先生方はどの
ように花から学ばれたというか、どのように花と出会われて、そして
どのように花と向き合っておられるのかということ、一言では言い
あらわされないと思うのですが、人に伝えるということなどをど
のようにご自身が享受されてこられたのかということなどお聞かせい
ただけますでしょうか。すみません、無茶ぶりばかりで。

肥原：僕はもう本当にドライに、仕事としてこの世界に入りました。
ただ、初めてしたお花が結構楽しくてですね、楽しくてというか、思っ
たほど嫌悪感なくこの道に進めたというくらいのものでしょうか。た
だ、これもまた、よく褒めていただいたからではないかな。続くため
に褒めてくれたんでしょうけれど。学生の頃は、先輩や同期にも割に
駄目出しをされるが多かった自分ですね、お花やり始めると皆
さんに褒めてもらえるからどんどん楽しくなって、ということで続け
ているという感じですね。ちょっと変な答えかもしれませんが。

松本：華道とのとても強い繋がりというか、導かれたというものを感
じられますね。池坊先生、いかがでしょうか。

池坊：はい。私の場合は、生け花を始めたのは早くなかったのです
けれども、それは父が、父本人は早くに父親を亡くしまして、11歳
で家元にならざるをえなかったのです。その時に、自分の気持ち
が確定しないうちに家元になるということで、お花の稽古をしなさい、
ということで生け花を始めたということが、とても深く心に残ってい
たようです。自分の娘には強制するのではなくて、本人がやりたいと
思うまで待ちたいと、機が熟すまで待ちたいという風にしてくれまし
たので、まわりから押されるのではなくて、自分がやりたいという時
期に達して生け花を始めたということが、肥原お家元の言葉を借りる
なら嫌悪感にならずに、今も生け花が気持ちよく出来ている、最初
の出発点だったかなと思います。

それから、花から学んだことというのは、花のひとつひとつの姿
そのものが、苦難の中で一生懸命伸びていこうとする、生きていこ
うとする姿勢をあらわしていますし、あるいは型に見られる色んな世
界観、依代観といった世界観が込められているということも日本のこ
とを知るうえでいい勉強になりました。実際的なこと、花そのものか
ら学んだことというのもあるんですけども、それと同時に、生け花
をされている方々というのがとても私にとっては大きな存在なんです
ね。というのは幼い頃は意識していなかったのですが、今大人になっ



てから考えると、お花の世界で生きてこられた先生方というのは、家庭や介護、そういうそれぞれの問題、抱えている事情がありながら、生け花を続けてこられて、今ようやくワークライフバランスや、働き方改革が取り上げられ、女性が社会で活躍するのをエンカレッジするような社会的な政策が広がっている中で、そういうことが言われる前から懸命に両立させて、ひとりの女性として本当に素晴らしい生き方を見せて下さった方ばかりだったのですね。そういう方はそれぞれの地域で活動されている方で大きく名前は残らないかもしれないけれども、そういった方々が本当に頑張ってくださっている、そういう生き方をして、こういう風に人間は生きて、年齢を重ねていくんだ、こういう風に生きていけばいいんだというロールモデルを示して下さったということが、私にとってはとても大きな道しるべであったし、今でも励みになっていますね。それがとても大きな収穫であると思っています。

松本：ありがとうございます。ひとつのことを極められ、そして続けていかれることそれ自体にやはり生き方が出るということで、花を通じてまたそういった出会ってということもおありだと。それが先生方を形成しているということをお聞かせいただいております。では、話が多岐に渡って参りましたけれども、ぜひ会場の皆様からも、今の話の中でも結構ですし、連想されたことなど、なかなかない機会ではございますので、先生方へのご質問などございましたらぜひ、お聞かせいただければと思います。ご質問される方は、どの先生へのご質問なのか、3人の先生方共にお尋ねになりたいということでも結構ですので、どうぞ、勇気を持ってご質問頂ければと思います。

中野：大変面白く、興味深く聞かせていただきましたが、最初にお尋ねしたいのですが、「宇宙を瞬く花」このテーマが、「を」というのがちょっと気になるのですがね。先程井上先生からも、最初にちょっと触れられましたけれども、主催者としてはどんな意図があって、「を」と使われたのかということがひとつ。それからもうひとつはですね、池坊先生の一期一会という話がありました。松本先生の方からも、音楽なんかもそうなのかもしれませんが、一期一会という、まあ私なんかは能の舞台を拝見します時に、能の舞台はシテ方は四拍子、それぞれ表現がありますが、それと合わせて観客、その場に居合わせた観客も含めて、本当に、その時にしか存在しない臨場感がいいな、悪いなとこういう風に考えるわけですね。花の場合、それぞれひとりひとりが美しいと思うこと。これについてはずいぶんと考

えが変わってくるんだろうなと思います。もうひとつ。あの西洋で言うところの、西洋でと言うか、ここにも大きな花が飾ってありますけれども、よりたくさんの花のあるフラワーアレンジメントというものと、今観せて頂きます、生け花あるいは茶道花道といった時の、日本におけるところの花の考え方、これがどんな風に違うのか、この三つ、お教えいただければありがたいと思います。

松本：ありがとうございます。非常に本質的な三つの質問をいただきましたけれども、まず一つ目は、「宇宙を瞬く花」ということですね。このことに関しては、主催者の代表である森田所長から。

森田：はい。このタイトルは、私が考案したものでしてね、日本語ではございませんでしょうけれども、皆様になぞかけ問答に参加していただきたい一心でですね、宇宙の真理を垣間見せてくれる花。このいじらしい花達。この花の彩なす芸術。そしてその花の道ですね。それは日本の茶道と同じように、生活の行為の積み重ねの中から生まれてきた儀礼化であり文化化であると。それをもう一度見つめ直すということを皆さまに、なぞかけ問答的に投げかけたということでございまして、何卒ご容赦くださいませ。今日はたくさん来ていただいて、ご賛同いただいたのかなという風に考えております。どうも、失礼いたします。

松本：ありがとうございます。そういったことで皆様と一緒に考えていかさしていただければと思いますけれども、もうひとつの質問にうつらせていただいてよろしいでしょうか。一期一会ということですね。あの、能舞台のことも例えて言っていたら、このことについて先生方がかでしょうか。

中野：池坊先生のお話にありましたので。

松本：そうですね。あの私の解釈が間違っていたらご指摘いただきたいのですが、ひとつ花を完成させたらそれで終わりというわけではなく、無限に広がっていく中で、その相手もいてという風な、そういったことも含めて一期一会ということをおっしゃっていたのかなと思ったのですが、ご質問の内容はそういったことでよろしいですか。

中野：いえ、あの、その場その場で考えが違うのかなと思いましたのでね。



松本：ああ、その場その場の。

肥原：おそらく、僕が言ったことではありませんが、世の中には同じ枝なんて全くない、というところがありますから、ひとつひとつの出会いによって、同じ形にはめようと思っても微妙に違ったりする。そういうことが生け花にとってはひとつの一期一会的なものになるのでは、と感じます。

中野：ありがとうございます。

池坊：私もまさしく同じ意見で、同じ名前であっても同じ花材はないわけで、また生ける私達人間も、日々変わっていますよね。その時の体調であったりとか気持ちであったりとか、私達もやはり同じ人間ではなく、日々生まれ変わっていると言うと少し不思議に思われるかもしれないけれども、そういった意味でも、人も花もいつも新しい出会いの中で花を生けられるのではないのでしょうか。

松本：ありがとうございます。では、三つ目の西洋のフラワーアレンジメントとの違いということでしょうか。

中野：はい。

松本：では、井上先生お願いいたします。

井上：まあ、フラワーアレンジメントと生け花。単純にどう違うのかとか、どういった考え方の違いがあるんだという話は多々なされますね。ひとつ外形的なところから言うと、しばしば言われるのが、生け花というのは線條美というのを強調する、つまりラインですよ。ところが西洋はいわゆるマッサ、塊ですね。これは実は、明治期に日本に来て初めて、本当は初めてじゃないんでしょうけれど、西洋に生け花を紹介したというジョサイア・コンドルという建築家がありますが、彼が生け花の本というのを英語で書かれて、コンドルはイギリス人なんですけど、その中でそういう風に分析しています。先程、ちょっと画面でも説明した立花もそうですし、また生花、生花もそうですよね。西洋は、ブーケであったり、あるいはこれからクリスマスですけど、クリスマスリースであったり、まあその塊である。さらにコンドルは、じゃあなぜそうなのかというところまで論を進めていて、彼の解釈では、それは植生に由来していると。植生というのはつまり、

■

その土地の植物ですよ。日本の場合は桜とか梅とか、いわゆる花木が多いと。つまり木に生じる花です。ですからそれをマッスにするのは難しい、必然的に線條美になる。ところが西洋にも、もちろんそういう花木はありますが、いわゆる野に咲く花が多いと。それを摘んでいったら、逆にそれをラインで表現するのは非常に難しい。自然にブーケになると。まあ、そういう解釈、これは非常にわかりやすいですね。だから、外見上の違いはそういうところにあるのではないか。これと並んでもうひとつ違うのはやはり、先程も池坊先生のお話にありましたように、生け花というのは、作品だけが全てではないですよ。日本の茶道もそうですけど、やっぱり花を生ける、あるいは花を立てる、その過程ですよ。お茶も点てたお茶の味がどうこうよりもお茶を点てる過程、むしろそちらの方に主眼があって、そういう意味では作品というのは、副産物ですらある、結果として出来たものに過ぎない。ですからそれが芸術、特に近代に見られる芸術の考え方、つまり作品を作ることがゴールであるというのとはかなり違う。ですから作品の比較において生け花とアレンジの違いというのを見ると、そういう土俵自体が実は西洋的な見方ですよ。そういった意味ではプロセスに重点が置かれているし、あるいは更にそのプロセスの中になんていうか、求道的と言いますかね。あの山根翠堂^{やまねすいどう}という花道家なんかは、花を良くする為には自分自身が良くなてはいけない、という考え方をされていますよね。なぜなら、花というのは花道家の影であるから、というような言い方をしている。そういうところというのはやはり、そういう考え方をされているフラワーアレンジメントの作者の方もいらっしゃるかもしれませんが、一般的にはその辺りが大きな違いではないかなと思います。

中野：どうもありがとうございました。

松本：ありがとうございます。大変貴重なご質問をいただきました。花を生ける過程も含まれるということで、肥原先生からおもてなしをされる時の朝顔のエピソードをお伺いしましたように、井戸の中に入れておいて、まさに旬のところに至るまでの過程を含めてもてなすという、そういった精神性、人に対するもてなしということも含めて生け花ではないか。まさに花道という道がつく由縁かなと思いましたが、けれども。

会場の中からもたくさん手を挙げていただいております。では、よろしく願いいたします。次の方、少しお待ちください。

小磯：あの、専応口伝のことでお尋ねしたいのですけれども、今専



応口伝のことを勉強している最中なんです。それで、井上先生が専応口伝を出されまして、一番古いのは1523年の東京国立博物館にあります専応口伝で、君台観の中に入っている専応口伝が一番古いということで、私も初めて知ったのですけれども、そのことで、君台観を比較してみると、その君台観の中に専応口伝が所収されているということはどういう風なことなのか、井上先生の哲学的なお考えと、あと池坊をずっと継承されている専好先生の立場から、両方の立場からどのようなことなのかという見解をお伺いできたらと思ひまして、よろしくお願ひいたします。それからあと、群馬県から私参りましたが、群馬大学に1678年のものがあるんですね、やはり花伝書として残っておりまして、新田氏の文庫として群馬大学の方に入っているのですけれども、それが1523年から実に、155年の時空を超えて、群馬大学の新田文庫の中に伝承されているんですね。それには、内容が多少省略や変化したり、違うところもあるんですけど、本当に155年前のものなのかと思えるほど同じように、ちゃんと書き綴られているということに、それが私すごいなと思うんですね。余興で、最初に課題を出して、10人とか20人とかで耳伝いに伝えていくと、絶対に最後には全然違う答えになっているというゲームがありますよね。人間の伝達の曖昧さを覆して、ちゃんと時間を超えても同じように伝承されているというのはすごいなと思ひまして、やはりその伝承に畏敬の念を持っていて、大切に伝承されてきた、花に対する気持ちとか、先程の先生方のお話を伺う中でふと思ったんですね。だから宇宙を瞬く、本当に今から考えると瞬きをしたような時間なんですけれども、何百年も前のことが、同じように伝承されてきているのは、本当にすごいことだなあと思ひて、立場の違う先生お二人から意見を伺えたらと思ひました。同朋衆の君台観の中に、池坊専応さんの伝承が入っているっていうのがどういうことなのかな、とふと不思議に思ったのですよね。そのへんのところがどのような見解なのか、教えていただけたらと思ひます。よろしくお願ひいたします。

松本: では、井上先生、よろしくお願ひします。

井上: まず、『君台観^{そ うちょうき}左右帳記』という書物につきまして簡単にご説明しますと、いわゆる座敷飾^{ざしきかざり}に関する書ですよね。室町將軍家のすぐ近くに仕えた同朋衆^{どうぼうしゅう}という一団がございます、能阿弥だとか相阿弥だとか有名ですよ。そういった方々が、例えば今でいう床飾りですよ、ここにどういうのを置いて、あるいは棚にこういうのを置いて、そういうことをメモしたものが『君台観左右帳記』なんですけれども、まあ、『専応口伝』の話をする、今日私のスライドで最初



お見せしました『専応口伝』、つまり池坊専応さんが書き残したものですけれど、あれは前半がああいう、いわば花道論って言いますかね、生け花に関することですが、やはり後半は座敷飾りのこともきっちり書かれているわけですよ。ですから、後半部分は『君台観左右帳記』と非常に重複するところですから、やっぱり後世、それをまとめる時に『君台観左右帳記』としてまとめたものが残っているというわけでしょうね。ただ、その1523年のものが一番古いのかどうかというの、これはちょっとわからない。池坊さんがもっと古いものを持っていらっしゃるかもわからないです。そもそもああいうものは、今で言う出版されているものではないですから、いわゆる写本であって、その時にこれはと思った弟子に対して書き与えているものですから、いくつかのバージョンがありますし、それぞれ少しずつ違っている。そういう意味では、これは二つ目の質問に移ってしましますが、なんて言いますかね、それが今日まで残っているというのは非常に重要なことですよ、あの、六角堂にはモニュメントもありますよね、『専応口伝』の。今でも一種の聖典として存在しているし、しかもそれどころか、他の流派でもあの序文というのは書き写されているんですよ。ですからそういう意味では花道史にずっと残っている。しかもあの序文の内容は、専応よりも先代の頃から存在していたようですよ、まあ、いつ頃からかわかりませんが、少なくとも室町中頃からずっとあるというのは、たしかに奇跡的なことかもわからないですね。また戦国時代頃には既に、鹿児島宮崎あたりの島津家に仕えた武将なんかの日記にも、あの部分が書き写されているんですよ。そういう、日本全土にまで花道哲学が広がっているという点では、まあ面白いです。空間的にも時間的にもそれぞれ非常に大きな影響を与えた文章だなと思います。

池坊：はい、そうですね。池坊に『花王以来の花伝書』という古い花伝書が残っていて、それが、花に関するものとしては最も古いとされているのですが、その中には、座敷飾りというよりはむしろ生活に根差したような花の姿が書かれているんですよ。従来生きてきた座敷飾りがあり、一方で池坊が立てていた立花であったり、それから生活に根差した花があって、どうしてその時代にそういうものがあったということが前提としてあって、どうして『君台観左右帳記』に『専応口伝』が、ということはわからないのですが、『専応口伝』が文言だけではなくて、実際に生けた姿ですよ、基本構成図を載せた段階で、やはりそういったこともおそらく後世に伝えるべく、まとめて入ったのではないかなという風に思います。こちらとしては、史学的な研究がしきれていないところもありますので、ちょっ

と、そこまではっきりとした確証をもってお答えが出来ないのですけれども、おそらく、まとめる段階で何かの意図というか、後世に残したいというようなこともあり得たんじゃないかなという風に思っております。それで、多くの方が書いて、それを伝えるという形式を取っていますがその過程で伝言ゲームのようにどんどん文言が変わっていってしまう伝承もありますけど、この場合は写本された方がより厳密に注意を払って、忠実に異同がないように、食い違いがないように写した、そういう気持ちのあらわれで、枚数の幅があっても、違いが少ないという結果になっているのではないのでしょうか。



図 10 『花王以来の花伝書』華道家元池坊総務所蔵

松本: ありがとうございます。ご質問をいただいた方の造詣が深くて、しかもはるばる遠方からお越しくくださったのですね。素晴らしいことだなと思いますが、先程先生方もおっしゃっておられたように思いますけれども、消えていくものをいかに伝えていくか、そういう思いが、連綿と受け継がれてきたという歴史の長さ、人々がいかに大切に守ってこられたのかと改めて感じますね。ありがとうございます。

では、お待ちくださって、ありがとうございます。もう一方、よろしく申し上げます。

村上: すみません、私はあの、生け花自体はやってないんですけれども、ちょっと郷土史の観点で生け花を捉えていまして、江戸期の画集とか見ますと、挿花なんとかとか、生花もあるし立花などもあるかと思うんですけれども、今日の話聞いてますと、立花と生花が別なのはわかったんですけど、ある程度。それで、挿花と生花は同じだということに聞こえたんですけど、私自身、たぶん流派によって言い方が違うだけかなという認識しかなかったもんですから、ちょっとそこらへん詳しく教えていただきたいなと思ひまして。あと、例としては、百便図とか。でもそこらへんはたぶん、版元の関係で図書名じゃないかなとは思ってるんですけど、そこらへんもふまえて教えていただければなと思ひます。



松本：井上先生、お願いいたします。

井上：挿花っていうのは「挿」す「花」という漢字ですよ。実はあの、生け花の様式として、まず最初に立て花が出来て、それが近世に入って立花になったという、ひとつの線がありますよね。そしてそれ以外の花を生け花と呼んできた伝統があって、その生け花というのが何を指すかというのは、ものすごく曖昧です。現在では立花も含めて生け花ということすらありますし。もともとはお茶花のことを生け花とっていた時代もあるし。なんですけれども、少なくとも18世紀中頃以降に言う生け花っていうのは、いわゆる今の生花様式、生花様式ですよ、天地人の。その時に生け花という発音にどういう漢字を合わせたかということ、比較的ソウカ（挿花）という字をあてています。そしてそれを生け花と読んでいます。ですから江戸時代中期以降、挿花と書いていけば、今の生花様式と考えてほぼ間違いないですね。それで、それがずっと生花と呼ばれずに生け花と呼ばれていたもんですから、生活の活の字をあてて活花という場合もありますし、五つの景色と書いて、五景花という場合もありました。まあ色々ありましたけど、よく伝書なんかで挿花なんかと書いてあるのは、ほとんどが生花様式のもんです。そんな感じでよろしいでしょうか？

村上：生花と立花は違うんですか。

井上：生花と立花。生花と立花はまったく違いますね。立花は基本的に池坊さんでずっとされてきた、いわゆる七つ道具とか、九つ道具とか、そういう役枝が七つ九つ、もっと多かったです。一方で生花というのは、基本的にどこの流派でも天地人三才、三つの役枝ですよ。三つの呼び方は色々ありますがけれども。あと、立花の足元が真っすぐであるのに対して、生花は斜めに立っているとか、これも流派によってありますけれども、やはり生花と立花が別の様式であるというのは、どこの流派でもそうだと思います。

村上：どうもありがとうございました。

松本：ありがとうございます。本当に、今回のテーマに関して、非常に層の厚い、また見識の深い皆様がお集まりいただいているんだなということを感じます。他にはいかがでしょうか。



丸谷：井上先生にお尋ねしたいのですが、今の花道界を見て、どのように感じておられるのか、それから将来的にはどのような方向に向いていったらいいか、先生ご自身が何かお考えありませんか、とちょっとお尋ねしたいのですが、これから若いお方達にも、生け花のいいところをつないでいってもらいたいのので、一応、歴史的なところを先生にたくさん教えていただきましたので、ご本も読ませていただいているのですが、これから先のことを、ちょっとお尋ねしたいと思ひます。お願いいたします。

井上：ここに代表的な流派の家元が二人いらっしゃるなかで、何を言うか、本当に難しいところですが、これからの花道というのは、実際わりと難しいところですよ。肥原先生がおっしゃったように、悲観的にならざるを得ないようなところがあって、まあそれは花道人口の問題もあれば、生け花というものが何なのか、という考え方の問題でもあります。たぶん、生け花とは何かと聞かれて、クリアに答えられる花道家はとても少ないと思うのです。だからそうやってきた時に、じゃあどうして流派として、そういうものを存続させているのかとか、それが先程のアレンジであったり、あるいは普通に家で一輪挿しに挿すのとどう違うのかとか、そういうレゾンデートルと言いますか、存在理由というのをやっぱり、明確にする必要があると思うんですよ。それは、どの花道家も考えるべきなんだろうと思いますから。こういうことを言うと、後でお二人に生け花って何かという質問があると、非常に困られるかもわからないですけど、やっぱり生け花とは何かというのをひとつの定義と言いますかね、自分の中で持っておくことというのが大事になるのかなと思います。それと共に、何て言うか、花展の在り方とかにも課題はあるのではないのでしょうか。今、どの花展に行っても、現代花と古典花という風に分かりますよね。古典花っていうのは、伝統の型というのをずっと残していく、というコーナーがある。現代花っていうのは、何かアートの表現的なものを展示するコーナー。ですけどまあ、先程の質問にあったように、生け花とは何かと考える時に、やっぱりそれは両極端であって、つまり型を保存していくというひとつの極と、そういうのを取っ払って何かを表現していくという極があるけれども、その二つに分かれていくと、なんていうか、なかなか生け花の意味というのが、矮小化されていくんじゃないか、という危惧、そういう思ひはありますね。ですからあの、どうすればいいのか、というのはあれですけど、何か新しい花展の方式とか、そういうのを考えていってもいい時期かなとは思ひます。



丸谷：ありがとうございます。

松本：ぜひ、お二人の先生にも、この質問をお伺いして、しめくりとさせていただきますと思いますけれども、いかがでしょうか。今後の在り方というのを、それぞれの先生のお立場から、今思っていることを。

池坊：はい。今ご質問と、そしてお答えいただいて、本当に華道界にいるものとしては、耳が痛いと言いますか、まさに、どうしても華道界にいる人間は、内側の視点で見えてしまうので、なかなか客観的な視点、一般の方からは生け花展はどう見えているんだろうとか、生け花はどう映っているんだろうかって、なかなか思い至らない部分が多いのです。ですから、ご指摘いただいて、それぞれたくさん流派がある中で、それぞれの流派の存在意義と、そして活動をそれぞれが考えていかななくてはならない、本当に危機の中に私達はいるということを実感しました。ただ、これほどこの流派もやっていると思うのですが、やはり生け花人口が減っていったり、あるいは生ける環境がないといったマイナスの状況がある中で、それぞれの流派が、手をこまねいているわけではなくて、問題意識を持って、色んな取り組みをしているんですね。昔は生け花は花嫁修業でしたけれども、今は逆に花嫁修業ではなくて本当にやりたい人が、年齢に関係なくやりたい人がやるという状況になってきましたし、それから、外国の方で生け花に興味を持っておられる方も増えていますので、今までとは違った形で生け花人口を増やせるようなやり方というのは出来る、明るい未来は必ず待っていると私は思っています。ただ一番の発信方法というのは、花展ということになりますので、これまでの修練を発表する場である花展と共に、生け花に関心を持っている一般の方と、実際の教場を繋げるような方策、若い教授者を増やしていく方策など、色んな切り口から生け花振興を図っていきたくと思っています。また実際それぞれの流派は、それぞれの叡智で頑張っていると思います。

松本：ありがとうございました。まさに色々な形での発信ということも含めて、そして海外にも、あらゆる文化圏の方に対しても通じるものがあるということですね。ちょっと話が反れるようではありますが、555年目のこの節目の年に、映画化『花戦さ』ということを先程ご紹介いただきまして、これだけたくさんの方々へ今日お越しいただいているということですが、12月6日にDVDが発売されるということですので、もし見逃した方がいらっしゃいましたらこれ



を機に、ぜひ観ていただきましたと思います。

では、肥原先生、よろしくお願いします。

肥原：そうですね、今後のことは、先程も言いましたけれども、なかなか自分の中では先が見えていないのですが、個人的には、やはりどんな仕事も断らずですね、生け花というものを前向きに。自分の中では、ですけどね。それが全体にどう伝わるかというのは、正直よくわからない。悲観的になっているのかもわかりませんが、ただ自分自身としては、どこへでも出て行き、楽しんで花を生けるということを中心掛けてやっていくことから始まる、と考えています。

松本：私共のところへも本当に、断らずに来ていただいて、本当に心から感謝申し上げます。本当に、またとない機会をいただいたと思います。会場からもたくさんの貴重な、本質的な部分を掘り起こしていただけるようなご質問を多数いただきました。まだまだご質問いただきたいのですが、このパネルディスカッションも終わらせていただきます。日が落ちるのも早くなって参りましたので、ぜひまたこの会の余韻を残しつつもお持ち帰りいただきながら、ひとりひとりの中に花に対する心というものを、また生活の中で活かしていただければと思います。ありがとうございました。

鎌田：皆様、ありがとうございました。以上で、秋季シンポジウムを閉会させていただきます。本日は、本当にありがとうございました。お気をつけてお帰りください。



図 11 パネルディスカッションの様子

PROFILE

■ シンポジウム講師ご紹介 ■

講師プロフィール

●肥原 慶甫 /HIHARA Keiho

1971年、未生流九世家元肥原碩甫の次男として兵庫県に生まれる。大学卒業後、いけばなの修行を始め、流の企画・運営に携わる傍ら、数多くの出版、デモンストレーションを行う。2003年より「伝統文化いけばな子供教室」を主宰し次世代への継承に尽力。また、スイスや中国でのいけばな指導、留学生への講習会実施など、海外への普及に努める。2014年十世家元を継承し慶甫を称す。著書に「いけばな継ぎ紡ぐ」（講談社）

●池坊 専好 /IKENOBO Senko

小野妹子を道祖として仰ぎ、室町時代にその理念を確立させた華道家元池坊の次期家元。京都にある紫雲山頂法寺(六角堂)の副住職。いのちをいかすという池坊いけばなの精神に基づく多彩な活動を展開。2013年にはハーバード大学においてワークショップを、またニューヨーク国連本部において世界平和を祈念し献花を行った。アイスランド共和国名誉領事。京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科博士後期課程修了。

●井上 治 /INOUE Osamu

1976年、大阪府生まれ。京都大学文学部卒業、同大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文学)。現在、京都造形芸術大学准教授。専門は芸術哲学、伝統文化論。著書に『花道の思想』（思文閣出版、2016年）、『歌・花・香と茶道』（淡交社、2017年）等。

生活美学研究所構成員

所長 森田 雅子 教授

運営委員会 委員長 森田 雅子 教授
 委員 三好 庸隆 教授
 委員 北島 見江 教授

研究員 管 宗次 教授
 藤本 憲一 教授
 黒田 智子 教授
 三宅 正弘 准教授
 藤井 達矢 准教授
 村越 直子 准教授
 宇野 朋子 准教授
 松本佳久子 准教授
 鎌田 誠史 准教授
 和泉 志穂 講師

(嘱託) 藤田 治彦
 大阪大学名誉教授
 津曲 孝
 ケーキハウス ツマガリ 代表
 坪内 稔典
 京都教育大学名誉教授
 佛教大学名誉教授

助手 前川 多仁
 泊里 涼子
 草野 桃子
 酒井 稚恵

2018年7月1日現在

阪神間ルネッサンスのために

ここで、「阪神間文化」の生活美学的実験を。

生活美学研究所が居をかまえる甲子園会館(旧甲子園ホテル)は、武庫の流れをのぞみ、ゆたかな緑につつまれて、文化的環境デザインの実験場であった。

世界各地から人士が集い、ゆるりとホテルで憩いながら、多彩な議論をかわす理想郷であった。

この環境は、さきのいくさによって一度は失われたものの、今ふたたび甦りつつある。ここに新たな「生活美学」の視点から、阪神間に住まう人士とともに、しずかなる実験の一步をしるしたい。

武庫川女子大学 生活美学研究所

〒663-8121 兵庫県西宮市戸崎町1番13号

TEL 0798-67-1291

FAX 0798-67-1503

E-mail. seibiken@mukogawa-u.ac.jp

URL. <http://www.mukogawa-u.ac.jp/~seibiken/>